

富田林市文化財調査報告47

平成22年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

2011. 3

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は、市域の中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。そのなかでも、中央部の石川とその支流によって形成された平野部は、遺跡も多く存在することから、古くから人びとの営みが行われていたことがわかっています。

しかし、このような事実の蓄積は多くの開発のなかから生まれてきたものであり、発掘調査による新たな発見と引き換えに、遺跡の破壊がなされてきたことを看過することはできません。

本書は、平成22年に実施した埋蔵文化財調査の成果をまとめたものです。ここに掲載しました新堂廃寺跡は、オガンジ池瓦窯跡、お亀石古墳とともに、平成14年に国史跡に指定されました。我が国の歴史を知るうえで欠くことのできない重要な遺跡であるとともに、本市にとって貴重な宝であります。

これらを次の世代に引き継ぐために、発掘調査で得られた見地を有効に活用されることを、望んでやみません。

最後になりましたが、調査および本書の刊行にご協力いただきました地元住民のみならず、さまや関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

平成23年3月

富田林市教育委員会
教育長 堂山博也

例 言

1. 本書は、平成22年度国庫補助事業「市内遺跡緊急発掘調査事業」の報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会文化財課が実施し、平成22年4月1日に開始し、平成23年3月31日に終了した。ただし、整理作業等の都合から、本書には平成22年12月31日までに調査が終了したものを掲載した。各年度の調査体制は以下のとおりである。
平成21年度 中辻 亘、青木昭和、石田朋子、高見澤太基（非常勤職員）
平成22年度 中辻 亘、石田朋子、角南辰馬、高見澤太基（非常勤職員）
3. 本書に掲載した平成22年の新堂廃寺跡の調査は、新堂廃寺等整備委員会（委員長：上原真人）の指導のもと実施した。現地調査は石田が、出土遺物の整理作業は栗田 薫（同課非常勤職員）が担当した。
4. 本書の作成にあたっては、第2章第2節を栗田が執筆した。それ以外の執筆および編集を角南が担当し、小島扶左子（同課臨時的任用職員）がこれを補佐した。
5. 平成22年の現地調査および整理作業には、以下の者の参加を得た。（敬称略）
上田伸子、大川 健、瀬戸直子、濱田嘉仁、藤川 大、前野美智子、南 貴明
6. 本書で使用する標高は東京湾標準潮位（T.P.）、方位は座標北で表示している。新堂廃寺跡の調査における座標値については、測量法改正前に行われた調査成果との整合を図るため、日本測地系を用いている。
7. 現地調査における土色の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編）を使用した。
8. 調査にあたり、下記の方々と機関から指導、助言ならびに協力を得た。記して感謝します。（順不同・敬称略）
上原真人、大脇 潔、北口照美、平澤 毅、中村浩道、山岸常人（以上、新堂廃寺等整備委員会）、
小浜 成、大阪府教育委員会文化財保護課

目 次

第1章 平成22年の調査状況	1
第2章 国史跡 新堂廃寺跡 (SH2009-1) の調査	
第1節 現地調査の結果	4
第2節 遺物	11
第3節 若干の検討と課題	26

挿 図 目 次

図1 市内遺跡分布図	3
図2 調査前に想定した伽藍配置と今回の調査区	5
図3 I区で確認した遺構の断面図 (S=1/20)	6
図4 I区 トレンチ平面・断面図 (S=1/50)	7
図5 II区 トレンチ平面・断面図 (S=1/40) および遺構断面図 (S=1/20)	8
図6 III区 トレンチ平面・断面図 (S=1/40)	9
図7 II区出土遺物 (須恵器、軒丸瓦、鴟尾、丸瓦、平瓦)	13
図8 III区出土遺物 (須恵器、瓦器)	15
図9 III区出土遺物 (軒丸瓦)	16
図10 III区出土遺物 (軒平瓦)	17
図11 III区出土遺物 (丸瓦、平瓦)	19
図12 講堂周辺における整備確認調査の成果 (S=1/200)	26

表 目 次

表1 発掘届 (通知) 受理件数	1
表2 発掘調査一覧	2
表3 試掘調査一覧	2
表4 調査区別の丸瓦一覧	23
表5 調査区別の平瓦一覧 (その1)	24
調査区別の平瓦一覧 (その2)	25

写真目次

写真1	新堂庵寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳航空写真（南東上方から）	4
写真2	S P 3断面状況（南から）	6

図版目次

図版1	（上段）Ⅰ区 遺構検出状況（南から） （中段）Ⅰ区 遺構段下げ後（南から） （下段）Ⅰ区 ビットの状況（北西から）
図版2	（上段）Ⅱ区 遺構検出状況（西から） （中段）Ⅱ区 S D 1 掘削状況（南から） （下段）Ⅱ区 S D 2 掘削状況（南西から）
図版3	（上段）Ⅲ区 東壁土層断面（西から） （下段）Ⅲ区 トレンチ全景（東から）

第1章 平成22年の調査状況

平成22年1月から12月における文化財保護法第93条・第94条に基づく発掘調査の届出・通知は、表1のとおりであった。件数については昨年に比べて大きな増減はなかったものの、事前調査として実施した発掘調査の件数(表2)は約2倍と増加した。

これらのうち国庫補助事業として実施したのは、中野北遺跡(番号1)と中野遺跡(番号11)の調査の2件である。前者は甲田桜井線新設工事に伴う事前調査として行ったもので、10月から本調査を実施している(番号18)。また、後者については個人住宅の新築に伴う事前調査で、調査地は昭和63年から平成2年の3年間にわたって発掘調査を実施した道路(狭山河南線)に面する。調査区全面が流路(もしくは谷地形)内に位置することが判明し、その埋土から出土した遺物の大半は瓦であった。上記の3年間の調査においても、多量の瓦に加え塔心礎も見つかっており、今回の出土品についても、存在が指摘されながら位置を特定できていない「中野魔寺」に伴うものである可能性が高い。

また、この2件以外に、新堂魔寺跡の調査も国庫補助事業として実施した。本市では、平成14年12月に国史跡に指定された新堂魔寺跡、オガンジ池瓦窯跡、お亀石古墳の保存と活用を目指し、平成17年度に設立した新堂魔寺等整備委員会(委員長・上原真人)の指導のもと、同年度から継続して整備確認調査を実施している。平成22年の調査はその5年目にあたるものであり、その成果については次章で報告する。

国庫補助事業以外では、特筆すべき成果として粟ヶ池遺跡の調査について触れておきたい。集会所の建設に伴う事前調査(番号22)で遺構の存在を確認し、平成23年2月に浄化槽設置部分を本調査した。これまで須臾器やサヌカイトの散布地として知られているだけであったが、今回の調査でまとまった柱穴を確認した。出土遺物がほとんどなく、時期など不明な点も多いが、粟ヶ池北側に存在する集落の一端が初めて明らかになった。

ところで、本市では開発指導要綱に基づき300㎡を超える開発事業などにおいて、事業者の依頼と協力を得ながら、埋蔵文化財の有無について事前に確認するための試掘調査を実施している。平成22年は表3に示したとおり、計10件の試掘調査を行ったが、新たな埋蔵文化財包蔵地の確認はなかった。

表1 発掘届(通知)受理件数

	第93条			小計	第94条			合計
	発掘調査	工事立会	慎重工事		発掘調査	工事立会	慎重工事	
ガス			37	37				37
個人住宅	5	15	2	22				22
分譲住宅	1	7	3	11				11
その他建物	5	2		7	1	1		9
共同住宅	3	2		5				5
店舗	4	2		6				6
鉄道	1			1				1
宅地造成	1			1				1
その他開発	1	2	2	5	1	2	1	9
農業関係	1			1				1
電気		1		1				1
兼用住宅	1	1		2				2
道路					2		1	3
水道						4	7	11
下水道						4		4
小計	23	32	44	99	4	11	9	24

表2 発掘調査一覧

番号	調査日	所在地	遺跡名	調査原因	調査面積 (㎡)	調査結果	担当者
1	平成21年10月22日～平成22年2月25日	中野町三丁目	中野北遺跡	道路(国庫)	701.3	ピット、土坑、溝、井戸等を確認	高見澤
2	1月13日～1月27日	善志町三丁目	善志西遺跡	共同住宅	197.6	ピット、井戸等を確認	青木
3	1月13日～3月31日	緑ヶ丘町	新堂奥寺跡	整備確認(玉庫)	68.5	本書掲載	石田
4	1月15日	甲田二丁目	甲田遺跡	その他建物	2.9	遺構、遺物なし	青木
5	2月2日	善志町三丁目	善志遺跡	店舗	24	遺構、遺物なし	青木
6	3月11日～3月15日	中野町三丁目	中野北遺跡	道路	16	ピット等を確認	高見澤
7	6月23日	木戸山町	善志遺跡	共同住宅	16.5	遺構、遺物なし	角南
8	6月28日	錦織北二丁目	寺池遺跡	個人住宅	4.3	遺構、遺物なし	角南
9	7月6日	若松町五丁目	中野遺跡	店舗	9	遺構、遺物なし	角南
10	7月27日	昭和町二丁目	新堂遺跡	店舗	3.5	遺構、遺物なし	角南
11	9月21日	中野町二丁目	中野遺跡	個人住宅(玉庫)	12	道路を確認	角南
12	9月24日	かがり台	西大寺山遺跡・西大寺山古墳群	農家開拓	203.4	遺構、遺物なし	角南
13	10月4日	別井五丁目	別井遺跡	個人住宅	1.1	遺構、遺物なし	角南
14	10月4日	別井二丁目	別井遺跡	個人住宅	1.1	遺構、遺物なし	中辻
15	10月6日	善志町五丁目	善志西遺跡	店舗	4	包含層確認	角南
16	10月18日	善志町三丁目	善志西遺跡	鉄道	7.5	遺構、遺物なし	中辻
17	10月18日～11月12日	大字伏見堂	西野々古墳群	その他建物	13.9	明八塚古墳の周濠を確認	角南
18	10月20日～調査中	中野町三丁目	中野北遺跡	道路	1,380	ピット、土坑、溝等を確認	高見澤
19	11月10日	中野町二丁目	中野遺跡	個人住宅	2.3	遺構、遺物なし	角南
20	11月15日	善志町三丁目	善志西遺跡	鉄道	7.5	遺構、遺物なし	角南
21	12月7日	甲田二丁目	甲田遺跡	その他建物	6	溝状遺構を確認	中辻
22	12月13日	桜井町	栗ヶ池遺跡	その他建物	6	ピット、土坑を確認	中辻
23	12月14日	昭和町一丁目	新堂南遺跡	共同住宅	6.6	遺構、遺物なし	中辻
24	12月20日	錦織南一丁目	錦織遺跡	その他開発	2	遺構、遺物なし	中辻

表3 試掘調査一覧

番号	調査日	所在地	調査原因	調査面積 (㎡)	調査結果	担当者
1	1月6日	大字佐保	その他建物	1.2	遺構、遺物なし	青木
2	1月8日	大字新堂	その他建物	6	遺構、遺物なし	石田
3	1月27日	大字酒	個人住宅	6.4	遺構、遺物なし	青木
4	2月3日	宮町三丁目	宅地造成	3.5	遺構、遺物なし	青木
5	5月15日	宮町二丁目	個人住宅	1	遺構、遺物なし	中辻・角南
6	6月9日	廿山一丁目	宅地造成	2.4	遺構、遺物なし	中辻・角南
7	6月11日	廿山一丁目	共同住宅	3.8	遺構、遺物なし	中辻・角南
8	7月26日	寿町一丁目	その他建物	2.7	遺構、遺物なし	角南
9	9月1日	本町	その他建物	5	遺構、遺物なし	中辻
10	11月22日	廿山一丁目	宅地造成	3.4	遺構、遺物なし	中辻

第2章 国史跡 新堂廃寺跡（SH2009-1）の調査

第1節 現地調査の結果

本節では、富田林市緑ヶ丘町に位置する国史跡・新堂廃寺跡において、平成21年度に実施した現地調査結果と、それに対する所見を述べることにする。ただし、例言で示したように、諸般の事情から発掘担当者と報告者が異なるため、本節の本文内における所見は発掘担当者の見解を超えない範囲のものにとどめた。報告者の所見で発掘担当者と異なる部分等については、註や第3節（「若干の検討と課題」）に記して区別したということを、あらかじめ断っておきたい。

平成21年度の調査は、3箇所にてトレンチを設定して行った。調査区の名称はⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区である（註1）。Ⅰ区では、前年度調査のGトレンチの西側に一部重複させる形トレンチを設定し、平成18年度調査のAトレンチおよびGトレンチで検出した講堂内に位置するピットが、どのように広がるかを追及することを目的とした。Ⅱ区では講堂の南西隅、Ⅲ区では南面回廊の南西隅の想定箇所にトレンチを設定し、それぞれの遺構の位置を確定することを目的とした。各トレンチの面積は、Ⅰ区が約50㎡、Ⅱ区が約9㎡、Ⅲ区が約9.5㎡で、計約68.5㎡ある。現地調査は平成22年1月13日に着手し、同年3月31日に終了した。



写真1 新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳航空写真（南東上方から）

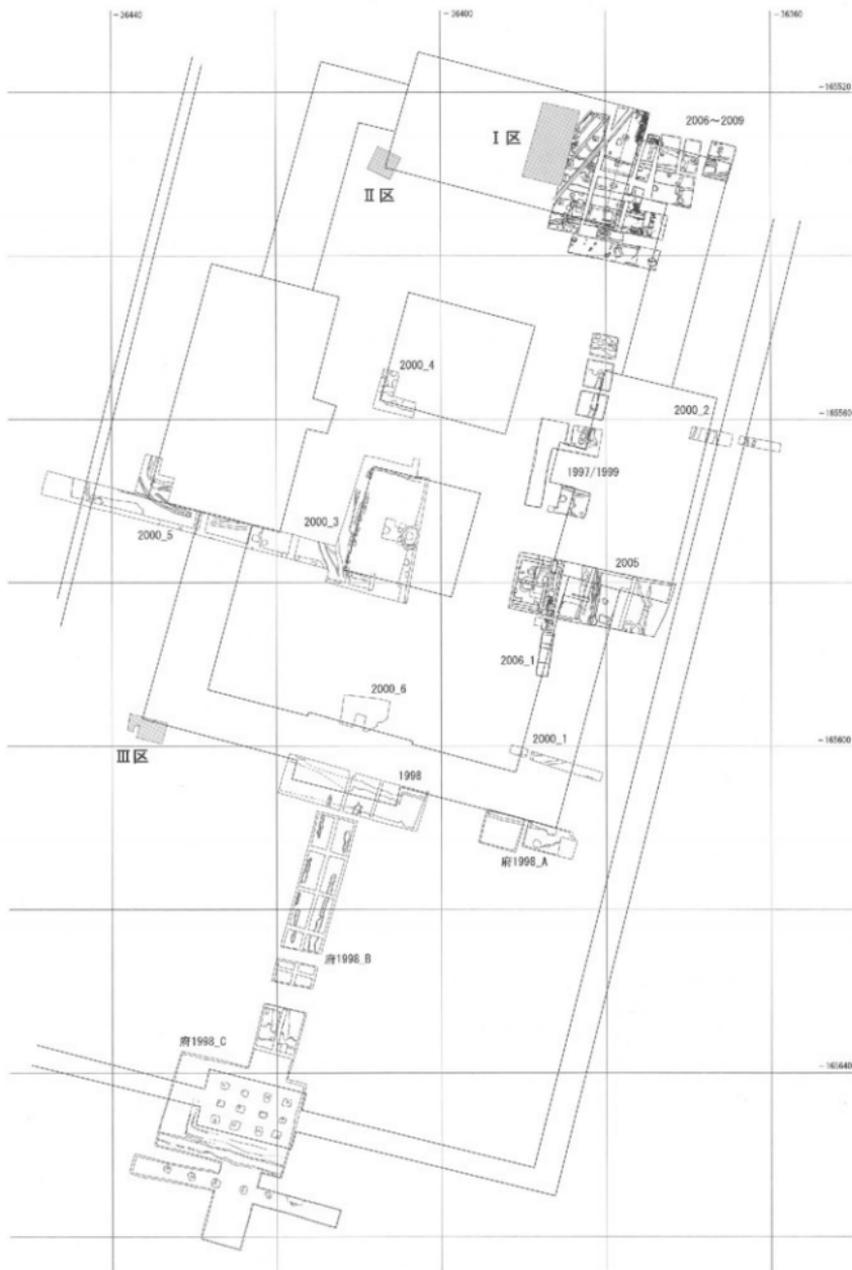


図2 調査前に想定した伽藍配置と今回の調査区

I区

基本層序は、地表面から順に盛土層（第1層）、旧耕作土層（第2～4層）、旧床土層（第5層）、地山層（第6層）である。これに加え、トレンチ西壁の南側および南壁全体にも表れている通り、南側の地山面直上にはぶい黄褐色粘質土層（第7層）の堆積が認められる。遺構の検出作業は、旧床土を取り除いた段階、すなわち南側を除いて地山面で行っている。

検出した遺構は、溝1条（SD1）、ピット8基（SP1～8）である。このうちSD1については東西方向に伸びる溝であり、ぶい黄褐色粘質土層（第7層）を掘り込んでいることを確認している。地山面で計測した幅は約60cm、深さは約8cmで（註2）、埋土からは磁器などが出土している。

ピットの平面形はおおむね方形を呈し、一辺は60～90cmである。それぞれ1基のピットに対し、もう1基のピットが南東方向にずれる形で掘り込まれている。すべてのピットを段下げて精査したところ、すべて柱痕跡を確認することができた。そのうち柱痕跡が比較的明瞭であったSP3のみ半裁を行い、検出面からの深さが約45cmであることを確認した。今回検出したピットと類似した配置および重複関係をもつものは、前年度調査のG-2トレンチでも確認しており、それらと合わせると南北で1間、東西で2間以上の建物が復元できる。ピットの重複関係から、南東方向に位置をずらして建て替えているものと思われる。各柱の掘形および柱痕跡は直線上に並ばない箇所もあるが、心々でおおよその柱間を計測すれば両建物ともほぼ同じであり、南北1.7m、東西2.2m程度である。遺物が出土したピットは2基あり、SP2の柱痕内から土師器が、SP6の掘形内から瓦が出土した。先述した通り、SP3以外は柱痕跡確認の段下げにとどめたため、当然ながら未掘部分に遺物が残っている可能性はある。

ところで、トレンチの南寄りを横断する形で、昭和34年調査時のトレンチ跡とみられる掘り込みを確認している。これに続くものはG-2トレンチでも確認しており、位置関係から38と呼称されていたトレンチと考えられる（註3）。



写真2 SP3断面状況（南から）

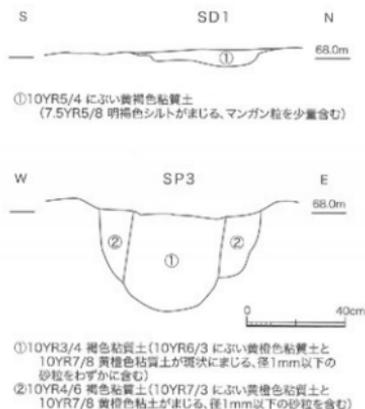
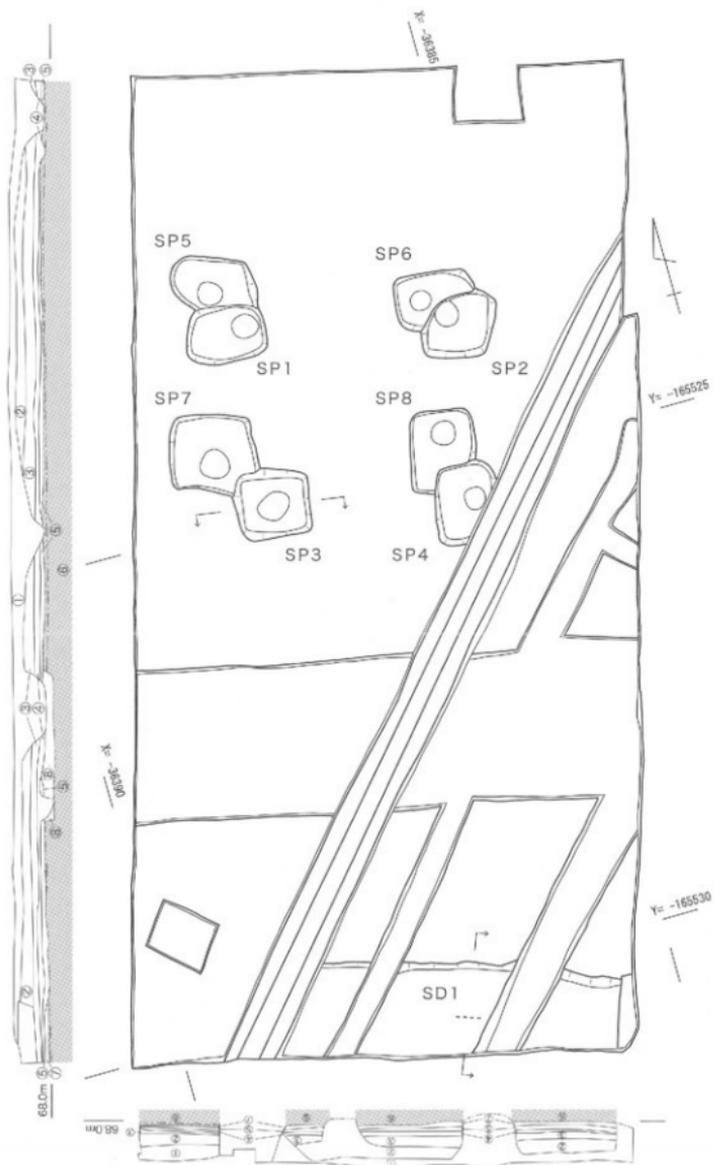


図3 I区で確認した遺構の断面図(S=1/20)



- ①2.5Y4/2 暗灰黄色土 (径1~5mmの礫を少量含む) 【礫土】
 ②2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (10YR7/8 黄褐色粘質土が少量まじる) 【旧耕作土】
 ③2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 【旧耕作土】 ④2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (10YR4/6 褐色粘質土が少量まじる) 【旧耕作土】
 ⑤10YR5/8 黄褐色粘質土 【旧土】 ⑥10YR6/8 明黄褐色粘質土 (2.5Y7/3 淡黄色土が少量まじる、マンガングを含む) 【地山】
 ⑦10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 (7.5YR4/6 褐色土が少量まじる、マンガングを含む) ⑧10YR6/8 明黄褐色粘質土 (2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土がまじる)

図4 I区トレンチ平面・断面図 (S=1/50)

II区

基本層序は、地表面から順に盛土層（第1層）、旧耕作土層（第2層）、旧床土層（第3層）、に
ぶい黄褐色シルト層（第4層）、暗褐色シルトを斑状に含む黄褐色粘質土層（第5層）、黄褐色粘質
土層（第6層）、灰黄褐色粘質土層（第7層）、地山層（第8層）である。遺構の検出作業は旧床土
を取り除いた段階で行っているが、トレンチ北壁の断面図から分かるように第4層はトレンチ全体に
広がらないため、検出面としては第4層と第5層が混在した面となる。

検出した遺構は溝2条（SD1、SD2）である。SD1はトレンチのほぼ中央で東西方向に伸び
ており、南北方向に伸びるSD2を切っている。SD1の幅は最大で58cm、深さは約10cmである。S
D2の東側には、それに平行するように旧耕作土面からの掘り込みが存在するが、位置関係からみて、
北面回廊と講堂の接続部に沿うように入れられた昭和35年調査時のトレンチ跡の一部であろう。これ
によりSD2の東側肩部については不明であるが、確認し得た最大幅は約90cmである。トレンチ北壁
に表れたSD2の断面をみると、底は地山面に達しているものを掘り窪めることなく平坦であ
り、検出面からの深さは最大で25cmであった。SD1の肩部を残すため南側の一面の掘削にとど
まったが、そこで検出した底面には明瞭な段差が存在する。底面上段の標高はほぼちょうど68mであ
り、トレンチ北壁で確認した溝の底面すなわち地山面の標高と一致する。底面下段についてはそれよ
りも約4cm低く、地山面が掘り窪められていることが分かる（註4）。

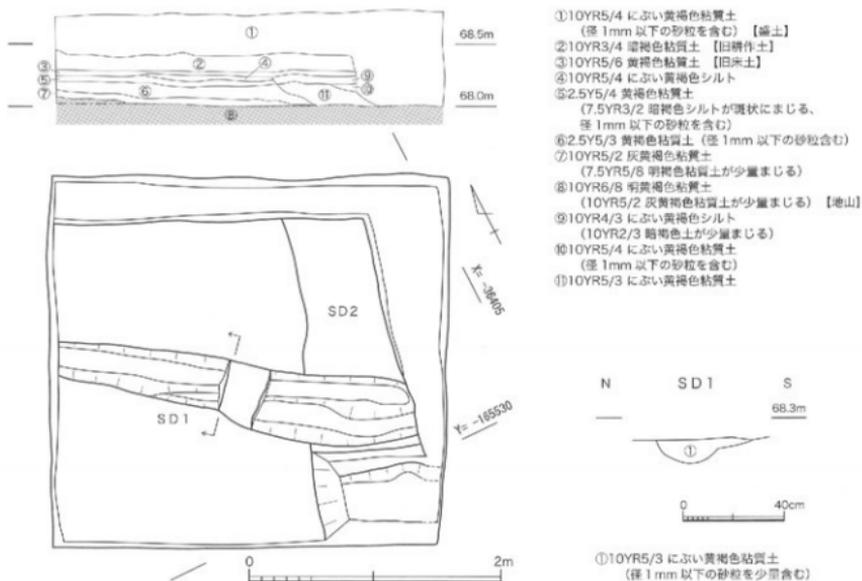


図5 II区トレンチ平面・断面図（S=1/40）および遺構断面図（S=1/20）

Ⅲ区

基本層序は、地表面から順に盛土層（第1・2層）、旧耕作土層（第3層）、旧床土層（第4層）、灰黄褐色シルト層（第5層）、にぶい黄褐色粘質土層（第6層）、明黄褐色粘質土層（第7層）、灰黄褐色粘質土層（第8層）、灰黄褐色砂質土層（第9層）、灰黄褐色粘質土層（第10層）、地山層である。なお、第7・8層についてはトレンチ西半分を中心に堆積する層であるため、図示したトレンチ東壁の断面には表れていない。

遺構の検出方法としては、第7～9層の各面の検出ごとに精査を行ったが、遺構は認められなかったため、最終的には地山面まで掘削している。トレンチ内における地山面は、トレンチ東壁から分かるように南側に向かって緩やかに傾斜しており、トレンチ北壁から南へ1.7m進んだところで傾斜がやきつくなる。

このトレンチのすぐ北側には、南面回廊に沿うように道路があり、それに付随して水路が設けられている。そのため、トレンチ北壁はすべて攪乱されており、堆積状況を確認できるような状態ではない。つまり、調査時に作成した図面には、東西方向の地山の起伏を正確に把握できるものがない。そこで、トレンチ平面図作成時に測定した地山面の標高をもとに、トレンチ北壁沿いの擬似的な地山の断面図を、今回の報告のために用意した（図6上）。それを見ると、トレンチ東壁から約1.75mにわたって高さ20cm程度の地山の高まりが認められる。しかし、そこから西に向かって地山面が再び緩やかに上昇している状況が窺える。

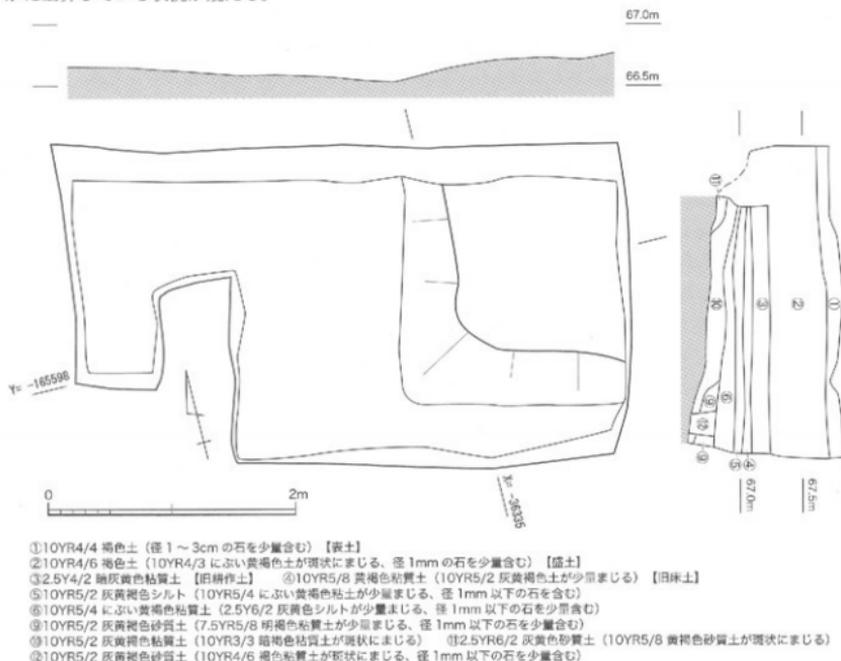


図6 Ⅲ区トレンチ平面・断面図(S=1/40)

註

1. 整備確認調査におけるトレンチの名称について、報告者の見解を述べておきたい。東方建物の南辺と東面回廊の接続部周辺に設定したトレンチには名称を付けず、調査した年度で呼称しているのに対し、講堂と東面回廊の接続部周辺に設定したトレンチには、調査を開始した平成18年度からアルファベット順に付けている（A～Hトレンチ）。今回は調査区をローマ数字によって呼称しており、一連の調査において一貫性を欠いているといわざるを得ない。今後の調査および正式報告に向けて、トレンチ名を付け直すことも選択肢の一つであるが、検討中の課題である。いずれにせよ、不用意な変更は混乱を生むだけであるため、今回の報告では調査担当者が呼称した調査区およびトレンチ名をそのまま採用した。遺構名称および番号の付け方についても同様である。
2. SD1については、その肩部を残さずに第7層を取り除き、最終的に残存した肩部のラインも記録できていないので、正確な形状をつかむことができない。ちなみに、今回検出した溝の北側の肩部は、Gトレンチで検出している溝（SD02）の肩部に繋がる。しかし、前年度報告におけるSD02の幅は約2m、深さは約5cmであり、今回のトレンチで確認したSD1の埋土とにぶい黄褐色粘質土の堆積（第7層）を一つの遺構埋土と認識していることになる。G-2トレンチ西壁の断面図（青木2010；p.20）をみると、SD02の肩部に明黄褐色土（土層番号⑥）が堆積しているが、これが今回検出したSD1の埋土にあたるのではないかと考えている。
3. I区における西壁の断面図（図4）をみると、トレンチ38は地山面から切り込んでいる。しかし、調査当時の状況が耕作地であったことを考えると、今回認識した3面の耕作土面（第2～4層）のいずれかから切り込んでいたとみるのが妥当と考える。II区で確認した旧トレンチは、旧耕作土面から切り込んでいるが、その埋土と盛土（第1層）の境目は記録されていない（図5）。また、II区には昭和34年の調査で設定されたトレンチ35も重複していると思われるが、今回の調査図面からはその存在を窺い知ることはできない。しかし、写真を見る限りでは、トレンチ西壁において土層の乱れを確認できることから（図版2中段）、その可能性は高いと思われる。ちなみに、G-2トレンチ西壁の断面図（青木2010；p.20）においては、トレンチ38上に旧耕作土・床土層が認められないものの、どの面から掘り込まれていたのかは判然としなない。このように、整備確認調査においては、旧トレンチの痕跡を正しく認識できていない箇所がある。
4. 底面下段の埋土がどのようなものであったかは不明であり、北壁以外のトレンチ断面も記録していないため、あくまで推測でしかないが、この段差は地山面で初めて検出し得た下層の遺構、すなわちSD2とは全く別の東西方向に延びる溝状遺構を捉えている可能性も指摘できる。

第2節 遺物

ここで報告する遺物は平成21年度の調査で出土したものである。出土総量は遺物箱〔内寸54×34×10(cm)〕に約46箱ある。調査区は3ヶ所（Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区）設けられている。調査面積はⅠ区が最も大きく、Ⅱ区とⅢ区はほぼ同じ面積である。ただし各調査区での遺物の出土量はⅢ区が最も多く、Ⅰ区、Ⅱ区からは少ない。つまりⅠ・Ⅱ区の両地区を合わせてもⅢ区からの出土量におよばず、調査面積に反してⅠ区とⅡ区の出土量は格段に少ないのである。まずⅠ区については講堂基壇上面の調査であることが起因している。過去の調査成果でも基壇上での遺物の出土量の少なさは指摘されているが（粟田2000；p.25）、この傾向は今回の調査でも追認された。一方、Ⅱ区の遺物出土量の少なさの原因は調査方法にある。調査の詳細は前節に委ねるが、Ⅱ区は設定調査区全体を掘り下げたのではなく、調査区内の一部が調査されただけであることは特記しておかねばならない。つまりⅡ区とⅢ区の遺物出土量の差は、実際には調査方法の違いによるのであるから、今のところ出土量の差はそれほど意味をもたないことになる。とりわけ瓦類は伽藍との関係を考えるために出土分布のデータが不可欠になるが、Ⅱ区からの出土資料については、その扱いに注意が必要になろう。

さて、遺物の大半が新堂廃寺の伽藍に所収されていたと考えられる瓦類であるので、Ⅱ区の遺物の取り上げに問題が残されているものの、それらの分布は明確にしておかなければならない。そこで各調査区での丸瓦・平瓦の群ごとの出土量を本節末の一覧表（表4・5）に示しておく。なお、今回の調査で出土した瓦資料は小破片が多かったため、軒丸瓦と軒平瓦は図化可能なものすべて、丸瓦、平瓦は比較的残りのよいものを図化した。ここに群表記した瓦類の詳細は、新たに確認されたⅡ区の平瓦（図7の13）を除いては、2003年に刊行された『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯・お亀石古墳』にすでに公表してされている。

以下、調査区ごとに報告する。

Ⅰ区出土遺物

Ⅰ区から出土した遺物には平瓦、須恵器、陶器、磁器、壁土がある。

Ⅰ区からの出土総量は遺物箱で1箱分にも満たない。遺物の大半が旧耕作土と認識された第2層目申とSD1からの出土である。これらの遺物のほかにも基壇上面で検出されたSP2、SP6からも出土している。SP2からは土師器片1点、SP6からは平瓦片1点ある。

須恵器、陶器、磁器の出土点数はおのおの1点ずつで、なおかつ小片であるため全体の形態が分かるものはない。壁土としたものはササ混じりの土塊であるため壁土とした。壁土片は最大でも直径2cm程度の小塊で約40g出土している。

瓦類は平瓦が出土しているだけである。平瓦には白鳳期（山田寺式期・川原寺式期）のものと、天平期のものがある。瓦類の総重量は約0.81kgである。

白鳳期の平瓦のうち山田寺式期の平瓦には、平瓦Ⅱ0Za（i）群と平瓦Ⅱ0Za（ii）群がある。それらの布袋は「布袋り平0」である。

川原寺式期の平瓦は1点で、平瓦Ⅱ0Bq群「布袋り平0」と表記される。

天平期の平瓦には桶巻き作りと一枚作りの両方が出土している。桶巻き作りのものには、平瓦Ⅱ0Bk群「布袋ト平0」がある。一枚作りのものには、平瓦Ⅲ2J2aa群「布ウ」と表記できるものと、平瓦Ⅲ2J2ae～平瓦Ⅲ2J2ba群「布ツ」としか表記できないものがある。なお、SP6から出土した平瓦は、平瓦Ⅱ0Bk群「布袋ト平0」と表記される。

Ⅱ区出土遺物 (図7)

Ⅱ区から出土した遺物には軒丸瓦、丸瓦、平瓦、螭羽瓦、鵝尾などの瓦類のほか、埴仏、土師器、須恵器、埴土、砂岩がある。それらの出土総量は遺物箱で約15箱分であるが、大半が瓦類である。瓦類の総重量は約42.0kgである。

容器類 (図7)

須恵器は坏身(1)と坏蓋がおのおの1点ずつある。土師器は小片のため形態は不明である。

埴仏

不純物を含まない精良な胎土からみて埴仏と考えられる。表面が剥離しているため、仏像の全体像は分からない。

瓦類 (図7)

瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、螭羽瓦、鵝尾と、新堂廃寺廃絶後に製造・使用された中・近世の平瓦が約0.4kg出土している。飛鳥期の瓦類には丸瓦、平瓦、鵝尾がある。白鳳期の瓦類には山田寺式期のものと川原寺式期のものがあり、山田寺式期のものには軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。川原寺式期のものには軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、螭羽瓦がある。天平期の瓦類には丸瓦、平瓦がある。

以下、新堂廃寺所用瓦を機能別、製造時期別順に記述する。

軒丸瓦 (図7)

軒丸瓦は山田寺式期のものが1点(2)ある。胎土から軒丸瓦G、あるいはH群であると考えられるが、外縁部しか残存していないため、そのどちらかは特定できない。

軒平瓦

軒平瓦は川原寺式期のものが1点ある。瓦当面が欠失しているが、平瓦部の叩き目痕跡から川原寺式期に比定される平瓦であることが分かる。そのため軒平瓦AA?—平瓦Ⅱ0 Za[Bq]群「布袋力平0」としか表記できない。段頸の軒平瓦であるが、貼り付けられた頸部も欠失している。

丸瓦 (図7)

丸瓦は飛鳥期から天平期までの各時期のものが出土している。飛鳥期の丸瓦は約2.5kg、山田寺式期の丸瓦は約0.2kg、川原寺式期の丸瓦は約1.0kg、天平期の丸瓦は約5.5kg、時期判別のできなかったものも含めての丸瓦の総重量は約11.5kgである。

飛鳥期の丸瓦には玉縁式丸瓦と行基式丸瓦がある。玉縁式丸瓦は玉縁Ⅰ2 Za群と表記されるが、布袋は観察できない。行基式丸瓦には行基Ⅰ1 Za[A]群「布袋二行基0」、行基Ⅰ1 Za[Am]群「布袋子行基1」、行基Ⅰ1 Za[Bc]群「布袋ワ行基0」、行基Ⅰ1 Za[Cn]群「布袋ナ行基0」、行基Ⅰ1 Za(ii)群「布袋口行基0」「布袋二行基0」「布袋ナ行基0」、行基Ⅰ1 Za(xiii)群で「布袋へ行基0」「布袋ヨ行基0」、行基Ⅰ1 Za(xiv)群「布袋ワ行基3」、行基Ⅰ1 Za(xv)群「布袋ワ行基0」と表記されるものがある。

山田寺式期の丸瓦は行基式丸瓦だけで、それらは行基Ⅰ1 Za(xvi)群で「布袋リ行基1」と表記される。

川原寺式期の丸瓦は行基式丸瓦だけで、それらには行基Ⅰ1 Za(xviii)群「布袋ル行基0」、行基Ⅰ1 Za(xiv)群「布袋ソ行基0」、行基Ⅰ1 Za(xx)群「布袋ル行基0」、行基Ⅰ1 Za[Br]群「布袋ル行基0」と表記されるものがある。

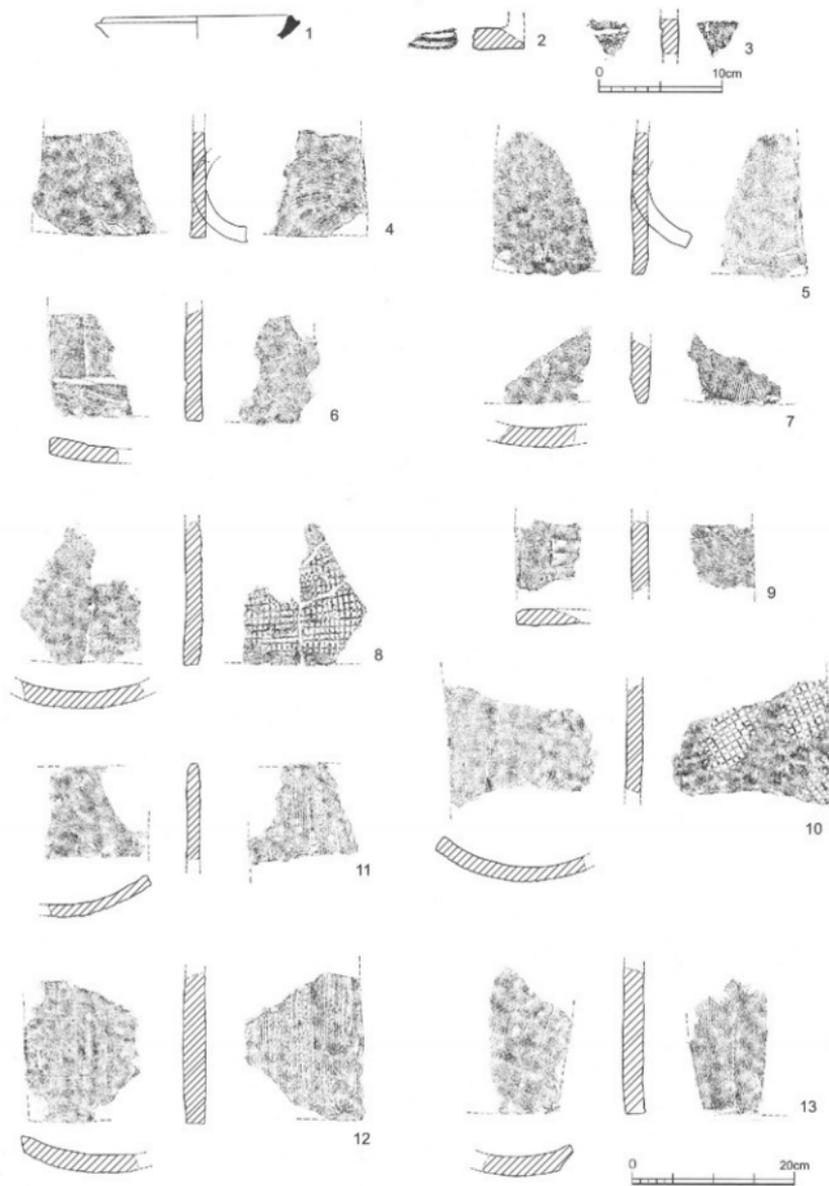


图7 II区出土遗物（须惠器、軒丸瓦、鵝尾、丸瓦、平瓦）

天平期の丸瓦には玉縁式丸瓦と行基式丸瓦がある。天平期の玉縁式丸瓦には、玉縁 I 321 Za[?]群「布袋レ玉縁4」、玉縁 I 332 Za[J1b]群「布袋ト玉縁0」、玉縁 I 332 Za[?]群「布袋ホ玉縁0」、玉縁 I 333 Za[?]群「布袋タ玉縁0」、玉縁 I 3? Za[J1b]群で「布袋タ玉縁0」「布袋レ玉縁0」「布袋不明」(4)と表記されるものがある。行基式丸瓦には、行基 I 1 Za[J1b]群で「布袋ト行基0」「布袋レ行基0」、行基 I 1 Za[J1f]群「布袋タ行基0」、行基 I 1 Za[J2ac]群「布袋ウ行基0」、行基 I 1 Za (xxii) 群で「布袋ホ行基0」「布袋ト行基0」「布袋レ行基0」、行基 I 1 Za (xxiii) 群「布袋ウ行基0」(5)と表記されるものがある。

平瓦 (図7)

平瓦は飛鳥期から天平期までの各時期のものが出土している。飛鳥期の平瓦は約2.6kg、山田寺式期の平瓦は約1.0kg、川原寺式期の平瓦は約9.4kg、天平期の平瓦は約10.0kg、時期判別のできなかったものも含めての平瓦の総重量は約29.9kgである。

飛鳥期の平瓦には平瓦 II 0 Aa群「布袋ヌ平0」、平瓦 II 0 Za[Aa]群「布袋ヌ平0」、平瓦 II 0 Za[Ad]群「布袋不明」、平瓦 II 0 Za[Ac]群「布袋二平0」、平瓦 II 0 Za[Ag]群「布袋二平0」、平瓦 II 0 Za[Ah]群「布袋ヨ平0」、平瓦 II 0 Za[Aj]群「布袋ヨ平0」、平瓦 II 0 Ea群「布袋不明」、平瓦 II 0 Za[Ea]群「布袋ヌ平4」(7)、平瓦 II 20 Za[Ch]群「布袋ネ平0」、平瓦 II 20 Za[Ch]群「布袋不明」、平瓦 II 27 Za[Ch]群「布袋ネ平0」(6)、平瓦 II 20 Za群「布袋口平0」、平瓦 II 20 Za群「布袋チ平0」と表記されるものがある。

山田寺式期の平瓦には平瓦 II 0 Za[Ha]群「布袋リ平0」、平瓦 II 0 Za (i) 群「布袋リ平0」、平瓦 II 0 Za (ii) 群で「布袋イ平0」「布袋リ平0」と表記されるものがある。

川原寺式期の平瓦には平瓦 II 0 Bd群「布袋ソ平0」、平瓦 II 0 Be群「布袋ソ平0」、平瓦 II 0 Bf群で「布袋ル平0」「布袋ソ平0」、平瓦 II 0 Bj群「布袋カ平0」、平瓦 II 0 Bp群で「布袋ル平0」「布袋カ平0」「布袋ソ平0」、平瓦 II 0 Bq群で「布袋ル平0」「布袋カ平0」(8)、平瓦 II 0 Za[Bf]群「布袋カ平0」、平瓦 II 0 Cc群「布袋カ平0」、平瓦 II 0 Cf群「布袋ル平0」、平瓦 II 0 Ck群で「布袋ル平0」「布袋ソ平0」、平瓦 II 0 Cm群「布袋不明」、平瓦 II 0 Za (iii) 群で「布袋ル平0」「布袋カ平0」「布袋ソ平0」と表記されるものがある。

天平期の平瓦には桶巻き作りと一枚作りの両方が出土している。桶巻き作りのものには、平瓦 II 0 Bk群「布袋タ平0」(9、10)、平瓦 II 0 Bn群「布袋ト平0」、平瓦 II 0 Cc群「布袋タ平0」、平瓦 II 0 Za (iv) 群で「布袋ト平0」「布袋タ平0」「布袋レ平0」、平瓦 II 1 J1d群「布袋不明」と表記されるものがある。一枚作りのものには、平瓦 III 2 J2aa群「布ウ」、平瓦 III 2 J2ac群「布不明」、平瓦 III 2 J2ad群「布ウ」、平瓦 III 2 J2ah群「布不明」、平瓦 III 2 J2ap群「布ツ」、平瓦 III 2 J2aq群「布ツ」(11)、平瓦 III 2 J2as群「布ツ」、平瓦 III 2 J2at群「布ツ」(13)、平瓦 III 2 J2au群「布ト」(12)、平瓦 III 2 J2ax群「布不明」、平瓦 III 2 J2ay群「布ト」と表記できるものと、平瓦 III 2 J2ac~平瓦 III 2 J2ba群で「布ト」あるいは「布ツ」としか表記できないものがある。これらのうち平瓦 III 2 J2at群「布ツ」(13)は凸面の叩き締め方が初出である。すなわち凸面の叩き締め方がすでに見つかっているような端縁にほぼ直交して、左から右へスライドさせるような叩き締め方ではなく、端縁に斜交させて、左から右へスライドさせて叩き締めたのち、さらにそのうえに反対側に斜交させて叩き締める。完形品でないので平瓦凸面全体を構成する叩きのパターンを認定することはできないが、この資料によれば縄目叩き[J2at]が交差するように残る。

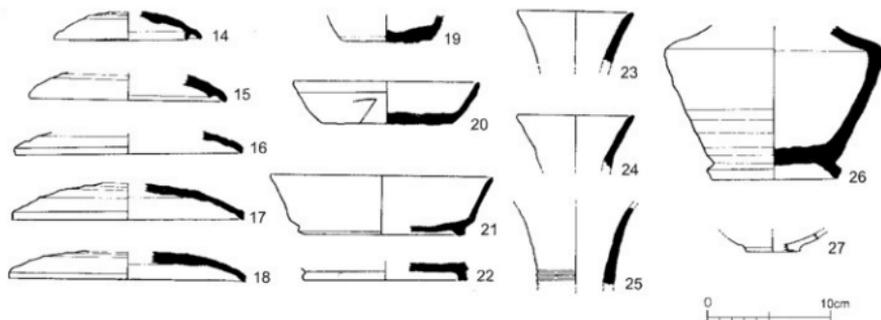


図8 III区出土遺物（須恵器、瓦器）

蠟羽瓦

川原寺式期の蠟羽瓦が1点ある。蠟羽瓦一平瓦Ⅱ0Za (iii) 群「布袋不明」と表記される。

鴟尾（図7）

飛鳥期の鴟尾（3）で、小破片が1点だけである。薄形品である。

Ⅲ区出土遺物（図8～11）

Ⅲ区から出土した遺物には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、蠟羽瓦などの瓦類のほか、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器などの容器類、壁土、焼土塊などがある。それらの出土総量は遺物箱で約30箱分ある。そのうち瓦類は28箱、壁土と焼土塊は1箱、容器類が1箱足らずである。このように遺物の大半は瓦類で、総重量は102.7kgある。

容器類（図8）

須恵器は坏蓋（14～18）、坏身（19～22）、壺（23～26）、甕腹片が、土師器は甕が1点、羽釜が1点あるが、他は小片のため形態が分からない。瓦器は椀が1点（27）ある。陶器は小片のため形態は不明である。磁器は1点で、プリントされた文様のある近代の茶碗である。

焼土類

焼土塊は遺物箱〔内寸54×34×15（cm）〕に約1箱と、比較的まとまった量の出土をみる。粘土あるいは砂が固まり、そのうち一部分は発泡するまでの高温を受けている。これら焼土塊が何かの鋳型、あるいは鋳造遺構の一部であった可能性も考えられるが、それが何なのかは判別できていない。

瓦類（図9～11）

瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、蠟羽瓦と、新堂廃寺廃絶後に製造・使用された中・近世の丸瓦が約0.3kg出土している。飛鳥期の瓦類には軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。白鳳期の瓦類は山田寺式期のものと川原寺式期のものがあり、山田寺式期のものには軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。川原寺式期のものには軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、蠟羽瓦がある。天平期の瓦類には軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。

以下、新堂廃寺所用瓦を機能別、製造時期別順に記述する。

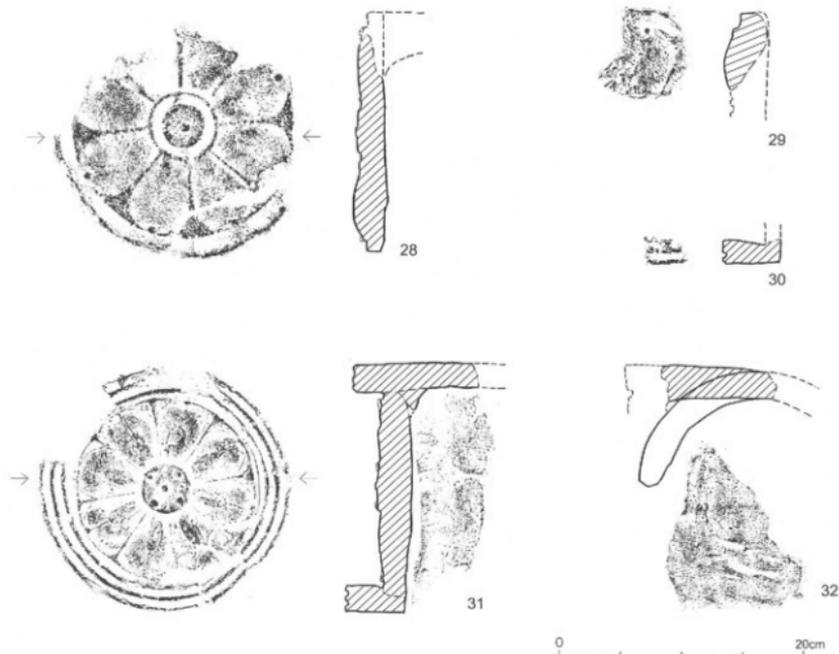


図9 Ⅲ区出土遺物(軒丸瓦)

軒丸瓦(図9)

軒丸瓦は6点出土している。飛鳥期の軒丸瓦は2点、白鳳期でも山田寺式期の軒丸瓦が2点、川原寺式期の軒丸瓦が1点、飛鳥期か白鳳期か、所属時期の判別できないものが1点ある。

飛鳥期に所属する軒丸瓦は軒丸瓦E群で2点(28, 29)ある。

山田寺式期の軒丸瓦には軒丸瓦G一行基11Za(xvi)群「布袋り行基0」(31)が1点、軒丸瓦G群、あるいはH群の外縁部片(30)が1点ある。

川原寺式期の軒丸瓦には軒丸瓦J群一行基11Za(vi)群「布袋り行基1」(32)が1点ある。

軒平瓦(図10)

軒平瓦は14点出土している。白鳳期でも山田寺式期の軒平瓦が3点、川原寺式期の軒平瓦が10点、天平期の軒平瓦が1点ある。

山田寺式期の軒平瓦には軒平瓦AA3群が2点(33, 34)と軒平瓦AA4群が1点(35)ある。

川原寺式期の軒平瓦には軒平瓦AA5群—平瓦Ⅱ0Za[Bb]群(38)が1点、軒平瓦AA5群—平瓦Ⅱ0Za[Bp]群(39)が1点、軒平瓦AA5群—平瓦Ⅱ0Za[Br]群「布袋り平0」(40, 41)が2点、軒平瓦AA5群—平瓦Ⅱ0Za[Br]群(42, 43)が2点、軒平瓦AA5群—平瓦Ⅱ0Za(iii)群(37)が1点、軒平瓦AA5群としか分からないもの(36)が1点、軒平瓦AA6群—平瓦Ⅱ0Za[Ck]群「布袋り平0」(44)が1点、軒平瓦AA7群—平瓦Ⅱ0Za(iii)群(45)が1点ある。

天平期の軒平瓦は瓦当面が欠失しているため確実ではないが、おそらく軒平瓦P群—平瓦Ⅲ2Za[J2aj]群と表記されるものと推測できる。

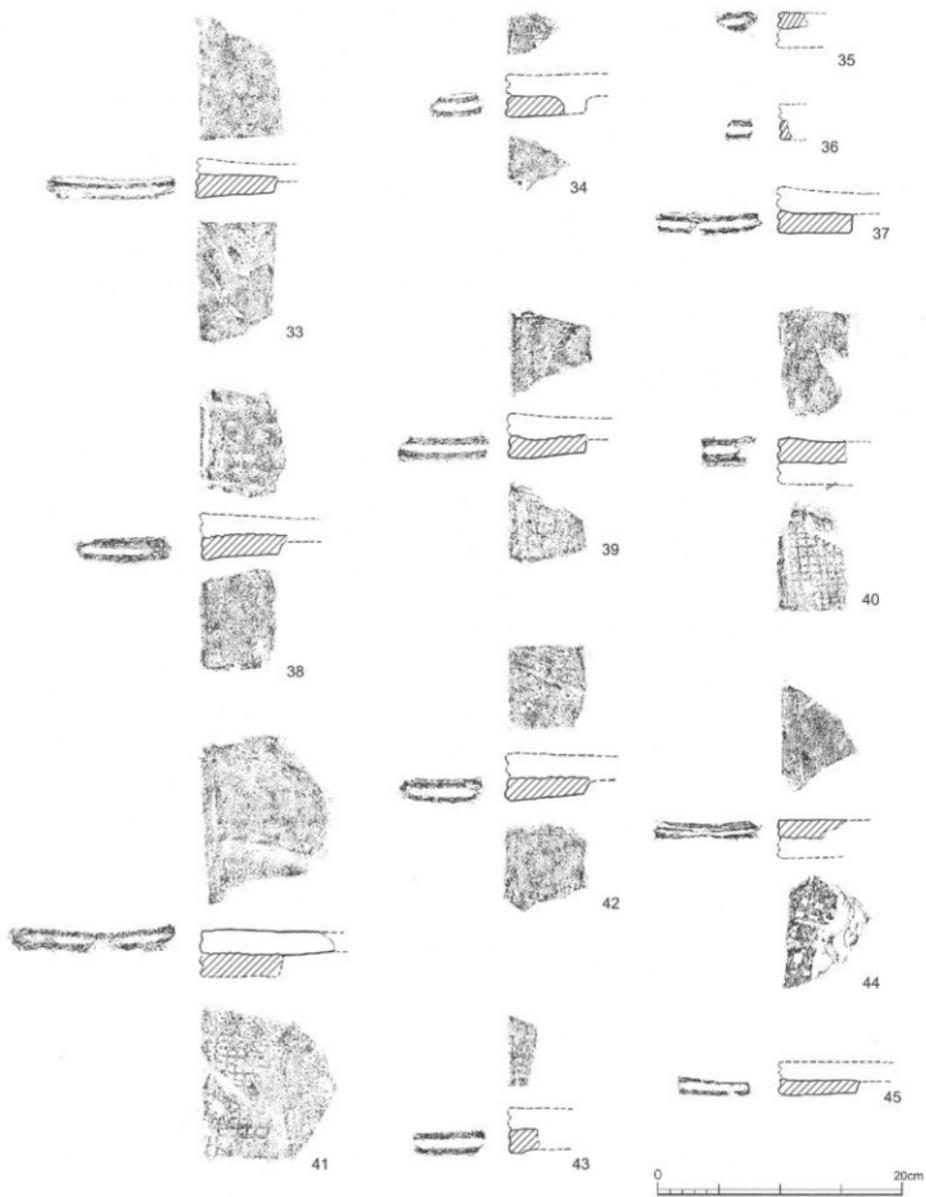


图10 III区出土遗物 (軒平瓦)

丸瓦 (図11)

丸瓦は飛鳥期から天平期までの各時期のものが出土している。飛鳥期の丸瓦は約5.5kg、山田寺式期の丸瓦は約0.8kg、川原寺式期の丸瓦は約2.3kg、天平期の丸瓦は約5.6kg、時期判別のできなかったものも含めての丸瓦の総重量は約25.0kgである。

飛鳥期の丸瓦には玉緑式丸瓦と行基式丸瓦がある。玉緑式丸瓦は玉緑 I 2 Za 群「布袋ハ玉緑0」と表記されるものがある。行基式丸瓦には行基 I 1 Za[Aa] 群「布袋チ行基0」、行基 I 1 Za[Ad] 群「布袋ナ行基0」、行基 I 1 Za[Ae] 群で「布袋二行基0」「布袋ナ行基0」「布袋二十ナ+口行基0」(46)、行基 I 1 Za[Ae] (+A) 群「布袋ナ行基0」、行基 I 1 Za[Ag] 群「布袋ニ行基0」、行基 I 1 Za[Bc] 群「布袋ワ行基2」、行基 I 1 Za[Bc] 群「布袋ワ行基0」、行基 I 1 Za (i) 群で「布袋二行基0」「布袋チ行基0」、行基 I 1 Za (ii) 群で「布袋二行基0」「布袋ナ行基0」「布袋二十ナ+口行基0」、行基 I 1 Za (iv) 群で「布袋ワ行基0」(47)「布袋ヨ行基0」、行基 I 1 Za (ix) 群「布袋口行基0」、行基 I 1 Za (viii) 群「布袋ネ行基2」、行基 I 1 Za (xiii) 群で「布袋ヘ行基1」「布袋ヨ行基0」、行基 I 1 Za (xv) 群「布袋ワ行基0」と表記されるものがある。

山田寺式期の丸瓦は行基式丸瓦だけである。それらには行基 I 1 Za (xvii) 群で「布袋リ行基1」、行基 I 1 Za (xviii) 群で「布袋イ+リ行基1」と表記されるものがある。

川原寺式期の丸瓦は行基式丸瓦だけである。それらには行基 I 1 Za[B r] 群「布袋ル行基0」、行基 I 1 Za (vi) 群で「布袋ル行基1」「布袋力行基0」、行基 I 1 Za (xviii) 群「布袋ル行基0」、行基 I 1 Za (xx) 群「布袋ル行基0」と表記されるものがある。

天平期の丸瓦には玉緑式丸瓦と行基式丸瓦がある。天平期の玉緑式丸瓦には玉緑 I 321 Za[?] 群「布袋レ玉緑1」、玉緑 I 332 Za[J1b] 群で「布袋ホ玉緑1」「布袋ト玉緑0」「布袋ツ玉緑0」、玉緑 I 332 Za[?] 群「布袋ホ玉緑0」、玉緑 I 3? Za[J1b] 群で「布袋ツ玉緑0」「布袋レ玉緑0」、玉緑 I 3? Za[?] 群で「布袋タ玉緑0」「布袋レ玉緑4」「布袋ツ玉緑0」と表記されるものがある。行基式丸瓦には行基 I 1 Za[J1b] 群「布袋ト行基0」、行基 I 1 Za[J2ac] 群「布袋ウ行基0」(48)、行基 I 1 Za (xxii) 群で「布袋ホ行基0」「布袋ト行基0」「布袋タ行基3」「布袋タ行基0」(49)「布袋タ+ホ行基0」「布袋タ+タ行基1」「布袋タ+レ+ト行基1?」「布袋レ行基0」「布袋ノ行基0」、行基 I 1 Za (xxiii) 群「布袋ウ行基0」と表記されるものがある。

平瓦 (図11)

平瓦は飛鳥期から天平期までの各時期のものが出土している。飛鳥期の平瓦は約13.2kg、山田寺式期の平瓦は約2.3kg、川原寺式期の平瓦は約11.2kg、天平期の平瓦は約23.1kg、時期判別のできなかったものも含めての平瓦の総重量は約73.5kgである。

飛鳥期の平瓦には平瓦 II 0 Aa 群「布袋ヌ平0」、平瓦 II 0 Za[Aa] 群で「布袋ヌ平3」「布袋ヨ平0」、平瓦 II 0 Za[Ab] 群「布袋ヌ平0」、平瓦 II 0 Ac 群「布袋ヘ平0」、平瓦 II 0 Za[Ac] 群「布袋不明」、平瓦 II 0 Za[Ac](+Ad) 群「布袋不明」、平瓦 II 0 Za[Ad] 群「布袋ナ+ナ平0」、平瓦 II 0 Za[Ae] 群で「布袋二平0」「布袋ヌ平4」「布袋ヨ平0」「布袋ナ平0」、平瓦 II 0 Za[Ae](+Cn) 群「布袋ナ平0」、平瓦 II 0 Za[A] 群「布袋ナ平0」、平瓦 II 0 Za[Af](+Cn) 群「布袋ニ平0」、平瓦 II 0 Za[Ag] 群で「布袋ニ平0」「布袋ナ平0」、平瓦 II 0 Za[Ag](+Cn) 群「布袋ナ+ナ平1」(50)、平瓦 II 0 Za[Ah] 群「布袋不明」、平瓦 II 0 Za[Ak] 群で「布袋ヌ平0」「布袋ヨ+ム平1」、平瓦 II 0 Bs 群で「布袋二平0」「布袋ヌ平3?」「布袋ヨ平0」「布袋ナ平0」、平瓦 II 0 Za[Bs] 群で「布袋二平0」「布袋ヌ平0」「布袋ヨ平0」、平瓦 II 0 Ca 群「布袋不明」、平瓦

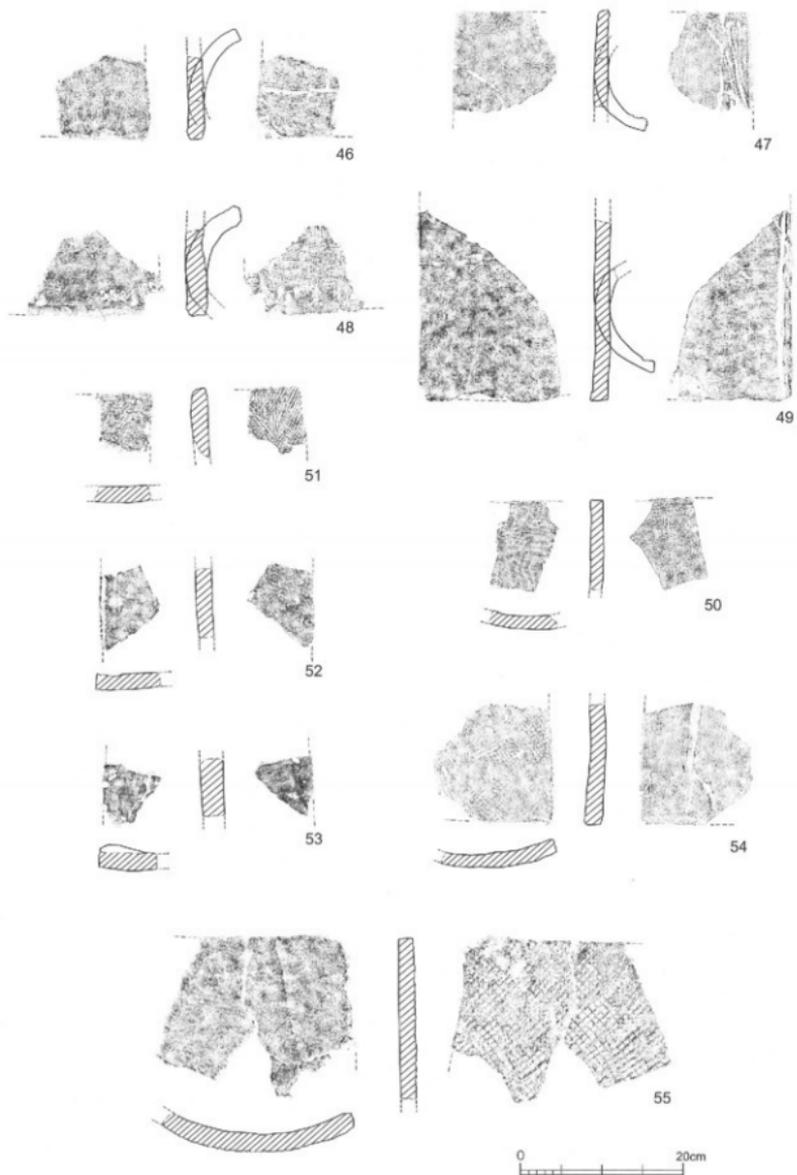


图11 III区出土遗物 (丸瓦、平瓦)

Ⅱ0 Za[Ca]群「布袋へ平0」、平瓦Ⅱ0 Da群「布袋不明」、平瓦Ⅱ0 Ea群「布袋ナ平0」、平瓦Ⅱ0 Ea群「布袋不明」(51)、平瓦Ⅱ0 Za[Fa]群「布袋ワ平0」、平瓦Ⅱ20 Za[Cg]群「布袋ネ平0」、平瓦Ⅱ27 Za[Ch]群「布袋不明」、平瓦Ⅱ20 Za群で「布袋口平1」「布袋チ平0」(52)「布袋ネ平0」、平瓦Ⅲ3 Za群で「布袋ハ平0」「布袋ヌ平0」(53)と表記されるものがある。

山田寺式期の平瓦には平瓦Ⅱ0 Za (i) 群「布袋り平0」、平瓦Ⅱ0 Za (ii) 群「布袋り平0」と表記されるものがある。

川原寺式期の平瓦には平瓦Ⅱ0 Bd群「布袋不明」、平瓦Ⅱ0 Bc群で「布袋ル平0」「布袋ソ平0」、平瓦Ⅱ0 Bf群「布袋ル平1」(55)、平瓦Ⅱ0 Bp群「布袋カ平0」、平瓦Ⅱ0 Bq群で「布袋ル平0」「布袋カ平0」、平瓦Ⅱ0 Br群「布袋ル平0」、平瓦Ⅱ0 Za[Br]群で「布袋ル平0」「布袋カ平0」(54)、平瓦Ⅱ0 Ck群「布袋ソ平0」、平瓦Ⅱ0 Za (iii) 群で「布袋カ平0」「布袋ソ平0」と表記されるものがある。

天平期の平瓦には桶巻き作りと一枚作りの両方がある。桶巻き作りのものには、平瓦Ⅱ0 Bk群で「布袋ホ平0」「布袋ト平0」「布袋タ平1」、平瓦Ⅱ0 Bm群「布袋レ平0」、平瓦Ⅱ0 Bn群「布袋タ平0」、平瓦Ⅱ0 Cc群「布袋タ平0」、平瓦Ⅱ0 Za (iv) 群で「布袋ト平1」「布袋タ平0」「布袋レ平0」「布袋レ平3」、平瓦Ⅱ1 Za[J1b]群「布袋レ平0」、平瓦Ⅱ1 J1c群「布袋レ平0」、平瓦Ⅱ1 J1d群「布袋レ平0」、平瓦Ⅱ1 J1d' 群「布袋レ平0」、平瓦Ⅱ1 J1f群「布袋レ平0」と表記されるものがある。一枚作りのものには平瓦Ⅲ2 J2aa群「布ウ」、平瓦Ⅲ2 J2ac群で「布ホ」「布ウ」、平瓦Ⅲ2 J2ac群「布不明」、平瓦Ⅲ2 J2af群「布ツ」、平瓦Ⅲ2 J2aq群「布不明」、平瓦Ⅲ2 J2as群「布不明」、平瓦Ⅲ2 J2au群で「布ト」「布ツ」、平瓦Ⅲ2 J2ay群「布ト」と表記されるものと、平瓦Ⅲ2 J2ac～平瓦Ⅲ2 J2ba群で「布ト」「布ツ」としか表記できないものがある。

蟻羽瓦

蟻羽瓦は川原寺式期のものが1点だけある。それは蟻羽瓦-平瓦Ⅱ0 Za (iii) 群「布袋ル平0」と表記される。

小結

遺物は講堂にかかわるⅠ区、Ⅱ区と、南面回廊の西南隅にかかわるⅢ区から出土している。とりわけ瓦資料についてはそれぞれの伽藍にどのような瓦類が所用されていたのかの解明が期待される場所であるが、発掘担当者の所見からは窺い知れない。しかし、伽藍と調査区の位置関係を考慮すれば、少なくともそれらの一部は伽藍との関係を示唆していると考えられるので、ひとまずは取りあげられた瓦資料から伽藍所用瓦の一端をみることにしよう。

なお、瓦類のうち軒瓦類や道具瓦類は出土量があまりに少ないので、今回はこれらの資料を除いて、量的分析の可能な丸瓦、平瓦を扱うことにする。

Ⅰ区は講堂基壇のほぼ中央東寄りの上面にあたる。基壇上での出土遺物の少なさはすでに指摘されているが、今回の調査でも遺物は少なく、その点では整合する結果を得ている。問題になるのは、基壇上で検出された柱穴群から出土した遺物であろう。今回の調査ではSP2の柱痕内から土師器片が1点、SP6では掘方内で天平期の平瓦Ⅱ0 Bk群「布袋ト平0」が1点出土している。両者とも柱穴内の柱痕を検出するため、段下げた時に出土したとのことであるが、これらが講堂と具体的にどのような関係をもつのかの解明は重要な問題となろう。発掘調査担当者の判断を待ちたい。

Ⅱ区は講堂基壇西南角部を含む周辺部にあたるため、講堂所用瓦が含まれていることが予測される。

ところで、講堂の建造時期が確実になっているのは天平期の遺構だけで、講堂基壇北東辺で確認された瓦積基壇がある(青木2007; pp.24-26)。この時の調査では講堂が飛鳥期から建造されていたのか、あるいはそれ以降に創建されたのかは明らかにされていない(註1)。今までのところ範囲確認調査で得られた状況証拠から、講堂も飛鳥期に創建されたものと想定され、創建時の新堂廃寺の伽藍配置は北端に講堂を置く「四天王寺式伽藍配置」とされてきた。もしこの想定が正しいならば、Ⅱ区でみつかった飛鳥期の瓦類の中で量的に多い一群が、創建講堂に所用されていた可能性が高いことになる。ただし位置的には講堂に取り付いたとされている北面回廊西側に葺かれていた瓦もまた含まれている可能性をも考慮しておく必要がある。それはともかくとして、飛鳥期に講堂が建てられていたという観点からⅡ区の瓦類の飛鳥期の造瓦単位をみると、丸瓦では軒丸瓦A群に所属するものが約0.06kg、軒丸瓦B・C群はなく、軒丸瓦D群は約1.85kg、軒丸瓦E群は約0.24kgあることが知られる。一方、平瓦には軒丸瓦A群のものはなく、軒丸瓦B・C群は約1.22kg、軒丸瓦D群は約0.53kg、軒丸瓦E群は約0.51kgあることが知られる。このきわめてささやかなデータから講堂所用瓦を想定するには無理がありすぎるが、あえて飛鳥期に講堂が創建されていたと仮定してその瓦群をみれば、そこで所用された瓦は、軒丸瓦A群や軒丸瓦B・C群ではなく、軒丸瓦D群の可能性が示唆されることになる。

講堂所用瓦を確実に知るためには、講堂周辺で出土した瓦類の回収が不可欠になる。残念ながらこれまでの講堂にかかわる調査では、その観点からの遺物の取り上げがなされていない。とりわけこの種の重要なデータが獲得できるはずであった平成18年度の発掘調査では、検出遺物がすべて取り上げられたのではなく、調査担当者の選択が働いた結果の遺物回収がなされている(註2)。その選択が何を根拠とされたのかは明らかにされていないが、今回のささやかなデータを確実なものとするためにも、それらの瓦類も含めて出土位置の明らかな瓦類をすべて回収し、その上での定量的分析が不可欠であろう。

Ⅲ区は南面回廊西南角部を含む周辺部にあたる。Ⅲ区の瓦類には南面回廊、あるいは西面回廊所用瓦が含まれていることが予測される。南面回廊は飛鳥期に創建されていることが、平成10年度の発掘調査で明らかになっている(小浜1999)。Ⅲ区でみつかった飛鳥期の瓦類は、南面回廊西南隅を中心にその北側と東側周辺に葺かれていた創建回廊所用瓦群と考えられる。そこでⅢ区での飛鳥期の造瓦単位をみると、丸瓦は、軒丸瓦A群は約0.23kg、軒丸瓦B・C群は約0.40kg、軒丸瓦D群は約1.91kg、軒丸瓦E群は約2.28kgで構成されている。一方平瓦は、軒丸瓦A群は約2.13kg、軒丸瓦B・C群は約0.18kg、軒丸瓦D群は約4.56kg、軒丸瓦E群は約2.46kgである。このデータだけで南面回廊あるいは西面回廊所用瓦を想定するには無理があるが、軒丸瓦A群や軒丸瓦B・C群ではなく、軒丸瓦D群あるいは軒丸瓦E群の造瓦単位が所用された可能性が示唆されたことになる。

回廊遺構はこれまでに範囲確認調査で検出されている。まず、平成10年度に中門から東側に延びる南面回廊が(小浜1999)、平成12年度には西面回廊の西辺の段差がみつかった(栗田2003)。これらの回廊基壇遺構のほかに、回廊所用瓦を示唆する瓦群として、平成9年度と平成11年度の調査で出土した飛鳥期の瓦群と、平成12年度の第1調査区出土の飛鳥期の瓦群に東面回廊所用瓦が含まれていると考えられている(栗田2005)。残念ながら南面回廊は大阪府教育委員会による調査であり、調査機関の違いに加えて、瓦資料に対する認識体系も異なるため、同じ週上での検討ができない。しかしながら富田林市教育委員会がおこなった範囲確認調査時の資料で、飛鳥期の西面回廊と東面回廊に所用された造瓦単位の一部を示すことができるので、それらと比較してみることにしよう。

まず、平成12年度調査の西面回廊周辺地区から出土した飛鳥期の瓦の造瓦単位をみる。軒丸瓦A群の造瓦単位に含まれる丸瓦は約2.12kg、軒丸瓦B・C群は約0.60kg、軒丸瓦D群は約16.42kg、軒丸瓦E群は約10.85kgで構成されている。一方平瓦は、軒丸瓦A群は約8.85kg、軒平瓦B・C群は約7.50kg、軒平瓦D群は約30.62kg、軒平瓦E群は約38.58kgである。

次に平成9年度、平成11年度の調査区と平成12年度の東面回廊所用瓦と想定される瓦群の造瓦単位をみると、軒丸瓦A群の造瓦単位に含まれる丸瓦は約3.54kg、軒丸瓦B・C群は約5.21kg、軒丸瓦D群は約7.78kg、軒丸瓦E群は約12.81kgで構成されている。一方平瓦は、軒丸瓦A群は約15.40kg、軒丸瓦B・C群は約17.55kg、軒丸瓦D群は約23.67kg、軒丸瓦E群は約13.52kgである（註3）。

既往の調査結果でもやはり軒丸瓦A群や軒丸瓦B・C群の造瓦単位ではなく、軒丸瓦D群あるいは軒丸瓦E群が圧倒的に多いことが知られる。この事実は、今回のⅢ区の調査成果と整合する。今のところ軒丸瓦D群と軒丸瓦E群間の量比に明確な差がないため、回廊の位置ごとにどちらか一方の群だけが所用されていたとされるのか、そうではなく混在していたとされるのか、というような特定はおこなえないが、すくなくともこれらの造瓦単位で造られた瓦群が回廊屋根に葺かれていたとされてきた想定が補強されたと考えて大過なからう。

註

1. 昭和59・60年の調査では、講堂も含めて検出されたすべての建物が天平期のものとして認識され、飛鳥期の伽藍はすべて現在の新堂庵寺伽藍想定域より北方に建てられていたと結論づけられていた（浅野ほか；p.12）。この点は平成9年度から12年度までの4回にわたる範囲確認調査で否定されることになったが、範囲確認調査では講堂周辺の調査をしないままに、状況証拠から判断して飛鳥期にも講堂が建てられていたと想定された（小浜1999,栗田2003）。平成17年度から始まった整備調査では、合計4回にわたる講堂の調査がおこなわれているが、今のところ創建講堂が飛鳥期に遡るのかどうかという課題を設定しての調査はおこなわれていない。
2. 平成18年度の調査では講堂基壇東北辺で瓦積基壇が検出された。この調査区でみつかった瓦資料にはこの基壇の構成瓦だけではなく、講堂屋根と北面回廊東側に葺かれていたと推測できる瓦が多量にみついている（青木2007）。しかし、これらの瓦群の中から取り上げられたのは鬼瓦1点だけである（栗田2008；p.7, 図10の鬼1）。今もまだ基壇構成瓦とともに、講堂屋根あるいは北面回廊東側屋根に葺かれたと想定される瓦資料が新堂庵寺跡に置かれたままになっている。
3. 「新堂庵寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究」では、2005年までに富田林市教育委員会が調査した新堂庵寺跡・オガンジ池瓦窯出土瓦を造瓦単位別に識別して、各伽藍の所用瓦を想定している（表25・26）。ただしこの表は飛鳥期の桶種別からみた造瓦単位で作成したため、軒丸瓦D群とE群を区別できていない（栗田2005；p.128）。しかし、叩き日や布袋などの情報も合わせると、さらに詳細な造瓦単位の識別は可能であることはすでに示している（山中・栗田2009）、ここではD群とE群を分別した計量値で記述した。この数値はともに同書pp.118-121掲載の表22から計量しなおしたものである。

表4 調査区別の丸瓦一覧

分類名(群)	市	I区(kg)	II区(kg)	III区(kg)	群ごとの総重量(kg)	確認された布袋(市南)	造瓦単位
玉縁12Za	ハ	--	--	0.18	0.18		軒丸瓦A群
玉縁12Za	不明	--	--	0.06	0.06		軒丸瓦A群
行基11Za[Aa]	チ	--	--	0.19	0.19		軒丸瓦B群
行基11Za[Ad]	ナ	--	--	0.05	0.05		軒丸瓦D群
行基11Za[Ae]	ニ	--	--	0.05	0.05		軒丸瓦D群
行基11Za[Ae]	ナ	--	--	0.55	0.55		軒丸瓦D群
行基11Za[Ae]	ニ・ナ・ロ	--	--	0.26	0.26	「布袋二十ナ+ロ行基0」(III区)	軒丸瓦D群
行基11Za[Ac](+AD)	ナ	--	--	0.29	0.29	「布袋ナ行基2」(III区)	軒丸瓦D群
行基11Za[Af]	ニ	--	0.08	--	0.08		軒丸瓦D群
行基11Za[Ag]	ニ	--	--	0.04	0.04		軒丸瓦D群
行基11Za[Am]	チ	--	0.15	--	0.15	「布袋ナ行基1」(III区)	軒丸瓦E群
行基11Za[Bc]	ワ	--	0.28	0.36	0.64	「布袋ワ行基2」(III区)	軒丸瓦E群
行基11Za[Cn]	ナ	--	0.14	--	0.14		軒丸瓦E群
行基11Za(i)	ニ	--	--	0.06	0.06		軒丸瓦E群
行基11Za(i)	チ	--	--	0.81	0.81	「布袋ナ行基1」(III区)	軒丸瓦E群
行基11Za(ii)	ロ	--	0.09	--	0.09		軒丸瓦E群
行基11Za(ii)	ニ	--	0.44	0.21	0.64		軒丸瓦E群
行基11Za(ii)	ナ	--	0.34	0.26	0.60	「布袋ナ行基1」(III区)	軒丸瓦E群
行基11Za(iii)	ニ・ナ・ロ	--	--	0.12	0.12	「布袋二十ナ+ロ行基0」(III区)	軒丸瓦E群
行基11Za(iii)	ニ	--	--	0.06	0.06		軒丸瓦E群
行基11Za(iv)	ワ	--	--	0.68	0.68		軒丸瓦E群
行基11Za(iv)	ロ	--	--	0.20	0.20		軒丸瓦E群
行基11Za(ix)	ロ	--	--	0.10	0.10		軒丸瓦E群
行基11Za(ix)	不明	--	--	0.18	0.18		軒丸瓦E群
行基11Za(viii)	ネ	--	--	0.40	0.40	「布袋ナ行基2」(III区)	軒丸瓦E群
行基11Za(xii)	ヘ	--	0.07	0.10	0.17	「布袋ヘ行基1」(III区)	
行基11Za(xiii)	ヨ	--	0.45	0.25	0.70		
行基11Za(xiv)	ワ	--	0.07	0.07	0.07	「布袋ワ行基3」(III区)	
行基11Za(xv)	ワ	--	0.30	0.05	0.34		軒丸瓦D群
行基11Za(xvi)	リ	--	0.12	0.72	0.84	「布袋リ行基1」(III区)、「布袋リ行基1」(III区)	軒丸瓦P.G.H群
行基11Za(xvii)	イ・リ	--	--	0.02	0.02	「布袋イ+リ行基1」(III区)	軒丸瓦F.G.H群
行基11Za[Be]	ル	--	0.04	0.49	0.53		軒丸瓦J群
行基11Za[vi]	ル	--	--	0.80	0.80	「布袋ル行基1」(III区)	軒丸瓦J群
行基11Za(vi)	カ	--	--	0.09	0.09		軒丸瓦J群
行基11Za(xviii)	ル	--	0.38	0.29	0.67		軒丸瓦J群
行基11Za(xix)	ル	--	0.41	--	0.41		軒丸瓦J群
行基11Za(xix)	ソ	--	0.10	0.55	0.65	「布袋ソ行基4」(III区)	軒丸瓦J群
玉縁1321Za[?]	レ	--	0.09	0.10	0.19	「布袋レ玉縁4」(III区)、「布袋レ玉縁1」(III区)	軒丸瓦K.L群
玉縁1332Za[J1b]	ホ	--	--	0.04	0.04	「布袋ホ玉縁1」(III区)	軒丸瓦K.L群
玉縁1332Za[J1b]	ト	--	0.27	0.13	0.40		軒丸瓦K.L群
玉縁1332Za[J1b]	ツ	--	--	0.20	0.20		軒丸瓦K.L群
玉縁1332Za[?]	ホ	--	0.12	0.09	0.20		軒丸瓦K.L群
玉縁1333Za[?]	タ	--	0.06	--	0.06	「布袋タ玉縁4」(III区)	軒丸瓦K.L群
玉縁13?Za[J1b]	タ	--	0.10	--	0.10		軒丸瓦K.L群
玉縁13?Za[J1b]	ツ	--	--	0.10	0.10		軒丸瓦K.L群
玉縁13?Za[J1b]	不明	--	0.38	--	0.38		軒丸瓦K.L群
玉縁13?Za[?]	ト	--	--	0.06	0.06		軒丸瓦K.L群
玉縁13?Za[?]	タ	--	0.07	0.10	0.17		軒丸瓦K.L群
玉縁13?Za[?]	レ	--	0.05	0.45	0.50	「布袋レ玉縁4」(III区)	軒丸瓦K.L群
玉縁13?Za[?]	ツ	--	--	0.04	0.04		軒丸瓦K.L群
行基11Za[J1b]	ト	--	0.03	0.06	0.09		軒丸瓦K.L群
行基11Za[J1b]	レ	--	--	0.19	0.19		軒丸瓦K.L群
行基11Za[J1f]	タ	--	0.12	--	0.12		軒丸瓦K.L群
行基11Za[J2a e]	ウ	--	0.91	0.83	1.74		軒丸瓦K.L群
行基11Za[J2a e]	不明	--	--	0.42	0.42		軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	ホ	--	0.67	0.16	0.83		軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	ト	--	0.85	1.14	1.98		軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	タ	--	--	1.73	1.73	「布袋タ行基3」,「布袋タ+タ行基1」(III区)	軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	レ	--	1.11	1.33	2.43		軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	ノ	--	--	0.08	0.08		軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	タ・ホ	--	--	0.10	0.10	「布袋タ+ホ行基0」(III区)	軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	タ・レ・ト	--	--	0.08	0.08	「布袋タ+レ+ト行基1」(III区)	軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	不明	--	--	0.66	0.66		軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	ウ	--	0.45	0.56	0.81		軒丸瓦K.L群
行基11Za(xxi)	不明	--	--	0.30	0.30		軒丸瓦K.L群
固定不能		--	2.48	8.01	10.49		
総重量(kg)		--	11.40	24.95	36.35		

表5 調査区別の平瓦一覧(その1)

分類名(群)	布	I区 (kg)	II区 (kg)	III区 (kg)	種ごとの 総重量(kg)	確認された布袋(市袋)	造瓦単位
平瓦H0 A a	ヌ	--	0.06	0.39	0.45		軒丸瓦E群
平瓦H0 Z a[A a]	ヌ	--	0.22	1.39	1.61	「布袋ヌ平3」(III区)	軒丸瓦E群
平瓦H0 Z a[A a]	ヨ	--	--	0.02	0.02		軒丸瓦F群
平瓦H0 Z a[A b]	ヌ	--	--	0.05	0.05		軒丸瓦D群
平瓦H0 A c	へ	--	--	0.07	0.07		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A c]	不明	--	--	0.04	0.04		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A c](+A d)	不明	--	--	0.39	0.39		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A d]	ナ	--	--	0.13	0.3	「布袋ナ+ナ平0」(III区)	軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A d]	不明	--	0.02	--	0.02		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A e]	ニ	--	0.10	0.11	0.21		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A e]	ヌ	--	--	0.13	0.3	「布袋ヌ平4」(III区)	軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A e]	ヨ	--	--	0.09	0.09		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A c]	ナ	--	--	0.16	0.6		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A e](C n)	ナ	--	--	0.07	0.07		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A f]	ナ	--	--	0.27	0.27		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A f](C n)	ニ	--	--	0.09	0.09		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A g]	ニ	--	0.13	0.06	0.9		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A g]	ナ	--	--	0.19	0.9	「布袋ナ平2」(III区)	軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A g](C n)	ナ	--	--	0.21	0.21	「布袋ナ+ナ平1」(III区)	軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[A h]	ヨ	--	0.11	--	0.11		軒丸瓦E群
平瓦H0 Z a[A h]	不明	--	--	0.26	0.26		軒丸瓦E群
平瓦H0 Z a[A j]	ヨ	--	0.13	--	0.13		軒丸瓦E群
平瓦H0 Z a[A k]	ヌ	--	--	0.05	0.05		軒丸瓦E群
平瓦H0 Z a[A k]	ヨ	--	--	0.22	0.22	「布袋ヨ(一ム)平1」(III区)	軒丸瓦E群
平瓦H0 B s	ニ	--	--	0.04	0.04		軒丸瓦D群
平瓦H0 B s	ヌ	--	--	0.03	0.03	「布袋ヌ平3」(III区)	軒丸瓦D群
平瓦H0 B s	ヨ	--	--	0.03	0.03		軒丸瓦D群
平瓦H0 B s	ナ	--	--	0.37	0.37	「布袋ナ+ナ平0」(III区)	軒丸瓦D群
平瓦H0 B s	不明	--	--	0.20	0.20		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[B s]	ニ	--	--	0.17	0.17		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[B s]	ヌ	--	--	0.55	0.55		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[B s]	ヨ	--	--	0.15	0.15		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[B s]	不明	--	--	0.41	0.41		軒丸瓦D群
平瓦H0 C a	不明	--	--	0.07	0.07		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[C a]	へ	--	--	0.04	0.04		軒丸瓦D群
平瓦H0 D a	不明	--	--	0.12	0.12		軒丸瓦D群
平瓦H0 B a	ナ	--	--	0.21	0.21		軒丸瓦D群
平瓦H0 E a	不明	--	0.09	0.10	0.33		軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[E a]	ヌ	--	0.20	--	0.20	「布袋ヌ平4」(III区)	軒丸瓦D群
平瓦H0 Z a[F a]	ワ	--	--	0.03	0.03		軒丸瓦D群
平瓦H20 Z a[G a]	ネ	--	--	0.14	0.14		軒丸瓦E群
平瓦H20 Z a[G a]	不明	--	--	0.02	0.02		軒丸瓦E、C群
平瓦H20 Z a[H a]	ネ	--	0.20	--	0.20		軒丸瓦H、C群
平瓦H20 Z a[H a]	不明	--	0.21	--	0.21		軒丸瓦H、C群
平瓦H27 Z a[C h]	ネ	--	0.82	--	0.82		軒丸瓦H、C群
平瓦H27 Z a[C h]	不明	--	--	0.16	0.6		軒丸瓦H、C群
平瓦H26 Z a	チ	--	--	0.14	0.4		
平瓦H27 Z a	不明	--	--	0.28	0.28		
平瓦H20 Z a	ロ	--	0.04	0.85	0.89	「布袋ロ平1」(III区)	
平瓦H20 Z a	チ	--	0.28	0.96	1.24		
平瓦H20 Z a	ネ	--	--	0.09	0.09		
平瓦H20 Z a	不明	--	--	1.40	1.40		
平瓦H3 Z a	ハ	--	--	0.68	0.68		軒丸瓦A群
平瓦H3 Z a	ヌ	--	--	0.61	0.61		軒丸瓦A群
平瓦H3 Z a	不明	--	--	0.85	0.85		軒丸瓦A群
平瓦H0 Z a[H a]	リ	--	0.01	--	0.01		軒丸瓦F、G、H群
平瓦H0 Z a[G a]	リ	0.13	0.70	1.27	2.10		軒丸瓦F、G、H群
平瓦H0 Z a[G a]	イ	--	0.07	--	0.07		軒丸瓦F、G、H群
平瓦H0 Z a[G a]	リ	0.04	0.16	0.97	1.17		軒丸瓦F、G、H群
平瓦H0 Z a[G a]	不明	--	--	0.05	0.05		軒丸瓦F、G、H群
平瓦H0 B d	ソ	--	0.50	--	0.50		軒丸瓦J群
平瓦H0 B d	不明	--	0.17	0.17	0.33		軒丸瓦J群
平瓦H0 B e	ル	--	0.04	0.46	0.50		軒丸瓦J群
平瓦H0 B e	ソ	--	0.95	1.77	2.71		軒丸瓦J群
平瓦H0 B e	不明	--	0.28	0.81	1.09		軒丸瓦J群
平瓦H0 B f	ル	--	0.22	1.03	1.25	「布袋ル平1」(III区)	軒丸瓦J群
平瓦H0 B f	ソ	--	0.07	--	0.07		軒丸瓦J群
平瓦H0 B j	力	--	0.11	--	0.11		軒丸瓦J群
平瓦H0 B r	ル	--	0.14	--	0.14		軒丸瓦J群
平瓦H0 B r	力	--	0.02	--	0.02		軒丸瓦J群

表5 調査区別の平瓦一覧(その2)

分類名(群)	布	I区 (kg)	II区 (kg)	III区 (kg)	群ごとの 総重量(kg)	確認された布袋(布向)	造瓦単位
平瓦II0 B p	ル	—	0.79	—	0.79		軒丸瓦J群
平瓦II0 B p	力	—	0.41	1.53	1.94	「布袋力平3」(III区)	軒丸瓦J群
平瓦II0 B p	ソ	—	0.53	—	0.53		軒丸瓦J群
平瓦II0 B j	不明	—	0.08	0.10	0.18		軒丸瓦J群
平瓦II0 B q	ル	0.11	0.26	0.68	1.04		軒丸瓦J群
平瓦II0 B q	力	—	1.52	0.54	2.06		軒丸瓦J群
平瓦II0 B q	不明	—	0.40	1.17	1.57		軒丸瓦J群
平瓦II0 B r	ル	—	—	0.66	0.66		軒丸瓦J群
平瓦II0 B r	不明	—	—	0.17	0.17		軒丸瓦J群
平瓦II0 Z a [B r]	ル	—	—	0.16	0.16	「布袋ル平1」(III区)	軒丸瓦J群
平瓦II0 Z a [B r]	力	—	0.53	0.12	0.65		軒丸瓦J群
平瓦II0 Z a [B r]	不明	—	—	0.21	0.21		軒丸瓦J群
平瓦II0 C e	力	—	0.23	—	0.23		軒丸瓦J群
平瓦II0 C f	ル	—	0.05	—	0.05		軒丸瓦J群
平瓦II0 C f	不明	—	0.05	—	0.05		軒丸瓦J群
平瓦II0 C k	ル	—	0.15	—	0.15		軒丸瓦J群
平瓦II0 C k	ソ	—	0.11	0.21	0.32		軒丸瓦J群
平瓦II0 C k	不明	—	0.07	0.25	0.32		軒丸瓦J群
平瓦II0 C m	不明	—	0.09	—	0.09		軒丸瓦J群
平瓦II0 Z a (iii)	ル	—	0.73	—	0.73		軒丸瓦J群
平瓦II0 Z a (iii)	力	—	0.03	0.55	0.58		軒丸瓦J群
平瓦II0 Z a (iii)	ソ	—	0.68	0.17	0.85		軒丸瓦J群
平瓦II0 Z a (iii)	不明	—	0.22	0.44	0.66		軒丸瓦J群
平瓦II0 B k	ホ	—	—	0.55	0.55		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 B k	ト	—	—	0.10	0.10		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 B k	夕	—	1.29	1.82	3.10	「布袋夕平1」(III区)	軒丸瓦K、L群
平瓦II0 B k	不明	—	0.07	0.38	0.35		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 B m	レ	—	—	0.20	0.20		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 B m	不明	—	—	0.07	0.07		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 B n	ト	—	0.20	—	0.20		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 B n	夕	—	—	0.40	0.40		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 C c	夕	—	0.35	0.33	0.67		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 Z a (iv)	ト	—	0.10	2.11	2.21	「布袋ト平1」(III区)	軒丸瓦K、L群
平瓦II0 Z a (iv)	夕	—	0.28	4.72	5.00		軒丸瓦K、L群
平瓦II0 Z a (iv)	レ	—	0.04	1.18	1.22	「布袋レ平1」「布袋レ平3」(III区)	軒丸瓦K、L群
平瓦II0 Z a (iv)	不明	—	0.16	2.78	2.93		軒丸瓦K、L群
平瓦II1 Z a [J1b]	レ	—	—	0.15	0.15		軒丸瓦K、L群
平瓦II1 J1 c	レ	—	—	0.09	0.09		軒丸瓦K、L群
平瓦II1 J1 d	レ	—	—	0.09	0.09		軒丸瓦K、L群
平瓦II1 J1 d	不明	—	0.07	0.12	0.19		軒丸瓦K、L群
平瓦II1 J1 d'	レ	—	—	0.13	0.13		軒丸瓦K、L群
平瓦II1 J1 f	レ	—	—	0.06	0.06		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a a	ウ	0.12	0.41	0.40	0.93		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a c	ホ	—	—	0.06	0.06		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a c	ウ	—	—	0.83	0.83		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a c	不明	—	0.16	0.12	0.28		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a d	ウ	—	0.15	—	0.15		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a e	不明	—	—	0.08	0.08		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a f	ツ	—	—	0.11	0.11		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a h	不明	—	0.09	—	0.09		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a p	ツ	—	0.05	—	0.05		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a p	不明	—	0.15	—	0.15		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a q	ツ	—	0.27	—	0.27		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a q	不明	—	0.73	0.07	0.80		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a s	ツ	—	0.34	—	0.34		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a s	不明	—	0.41	0.39	0.80		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a t	ツ	—	0.58	—	0.58		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a u	ト	—	0.96	0.31	1.27		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a u	ツ	—	—	0.30	0.30		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a u	不明	—	0.11	1.64	1.75		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a x	不明	—	0.06	—	0.06		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a y	ト	—	0.15	0.42	0.56		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a y	不明	—	—	0.91	0.91		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a e ~ J2 b a	ト	—	0.07	0.06	0.12		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a e ~ J2 b a	ツ	0.25	0.55	0.58	1.38		軒丸瓦K、L群
平瓦II2 J2 a e ~ J2 b a	不明	0.08	2.24	1.66	3.97		軒丸瓦K、L群
平瓦(固定不能)	—	1.00	6.95	24.01	31.95		
総重量(kg)	—	1.72	29.84	73.50	105.05		

第3節 若干の検討と課題

本節では、今回の調査で得られた成果を振り返るとともに、報告者が考えている現時点での課題を整理して、まとめに代えることにしたい。

まずⅠ区では、G-2トレンチで確認したものに繋がるピット群を検出した。講堂上のピット群が直線上に並ばないことは、すでに前年度報告の中でも指摘されていたが（青木2010）、1棟の建物を構成するものとして一括りできないことが分かった。また、前年度までに検出したピット群の時期については、「寺院造営前の遺構である可能性も考慮すべき」との指摘であった（青木2010）。しかし、今回復元した古い方の建物のピットから、天平期に属すると考えられる瓦が出土したことにより、1点のみの出土とはいえ、他のピットについても再考せざるを得ない。これまで検出したピット群からの出土遺物を、改めて見直す必要がある。

Ⅱ区については、講堂を考えるうえで重要な成果が得られた平成18年度調査（青木2007）を整理してから考えることにしたい。まずA-1トレンチで瓦積基壇を検出したことにより、天平期と考えられる講堂東辺の一部をおさえることができている。基壇の外側に転落した瓦を除去していないため、残念ながら基壇基底部の正確な標高が分からないが、立面図から67.8～67.9mと考えられ（註1）、その縁辺部における基壇の最も高い部分の標高は約68mである。一方、北面回廊を挟んだ南側の延長線上（A-2トレンチ内）については、雨落溝とされる「溝1」の存在が講堂東辺の復元根拠となっている。この溝1を横断するように攪乱が伸びており、これを利用して作成した土層断面図が提示され

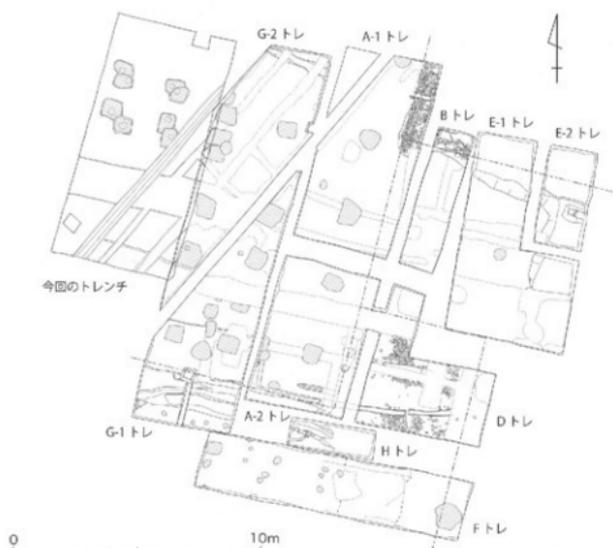


図12 講堂周辺における整備確認調査の成果 (S=1/200)

ているが、溝1の底の標高は約68mであり、瓦積基壇の基底部よりも高い。地形が南東方向へ下降していることを考慮すると、この溝1を瓦積基壇と対応させてよいかは検討を要する。溝1の東側は地山面が下降しているようで、これが講堂基壇に伴う地山削り出しにあたる可能性も考えているが、今後の検討課題である。ちなみに、Dトレンチの瓦敷はこの傾斜を埋めて整地したうえで施され、溝1も瓦敷のある整地土面から掘り込まれているようである。

これを踏まえたうえで、Ⅱ区の成果をみてみたい。まず、確認した地山面であるが、トレンチ北壁の土層断面図では東側で上昇する兆候が見て取れるものの、標高は68mでほとんど水平といってよい。講堂上のⅠ区で確認した地山面の標高も、北側がやや高いもののほぼ同じ値である。これらのことから、A-1トレンチで確認した瓦積基壇の西側においては、地山面すなわち残存する講堂上面がおおむね水平になっていることが理解できる。

今回検出した2条の溝(SD1、2)は、地山面に第4～7層(合計の層厚は約25cm)が堆積し、そこから切り込んでいる。SD1は伸びる方向からみて、講堂とは無関係のものと考えられるが、SD2の方向は講堂東辺の想定ラインに近い。SD2の底の地山面で確認した掘り込みについては、注において下層遺構である可能性を指摘したが、推測の域を出ない。これが東西方向に伸びる溝状遺構とすれば、講堂南辺の想定ラインに近くなる。講堂に関連する遺構として想定できるものとしては、雨落溝ということになるだろうが、両者とも講堂東辺の瓦積基壇の基底部よりも高い位置にあることが問題となる。

SD2については、ほぼ水平に推移する地山面上に堆積した層から切り込んでいるため、少なくとも講堂東辺で確認した瓦積基壇に対応させることは難しい。一方のSD2の底面で確認した掘り込みについては、検出面が地山面であるため、先に少し触れた新堂廃寺の立地を考慮する必要がある。講堂周辺の地山面は現状こそ水平に近い状態であるものの、寺院造営時は南東方向に下降していたと思われる。地形に従って講堂基壇の基底部の標高が東西で異なっていたことも考えられる。それにより検出面の高さの問題が解消されれば、東辺に対応する瓦積基壇がこの付近に存在し、その外側にあった雨落溝だけが残存している可能性は残るであろう。いずれにせよ、下層遺構であるかの確認をしなければ、これ以上の言及は難しい。

Ⅲ区については、トレンチ東寄り地山の高まりを確認した。調査前においては、南面回廊の南辺ラインを、トレンチ北壁からほとんど離れない位置で検出できるとの見方であったが、平面図に示した地山の形状でいえば、回廊の南西隅が南東方向へ大きくずれることになる。この地山の高まりが回廊基壇の残存部である可能性は高いと考えているが、地山面の明瞭な傾斜変換点を表現したものはいい難しく、これをもって回廊の位置を修正するのは適当ではないと思われる。

ほかの推定手段の一つとして、地山面直上の土層に注目してみると、地山面の最も高い部分には灰黄色砂質土層(第11層)が存在することが分かる。また、あくまで写真の観察結果からの所見と断ったうえで指摘しておくが、トレンチ東壁に表れている第10層はさらに分層できる可能性がある。これらは回廊の一部をなす盛土の可能性があり、地山面に明瞭な傾斜変換点が残されていないとしても、それらから回廊の範囲を推定する余地は残されていると思われる。

このように、今回の調査は多くの問題点を残す結果となったが、それはすでに指摘されているように(山中2010)、史跡整備確認として実施してきたこれまでの調査についてもいえることであろう。しかしながら、不十分な検討のまま今回の報告に至ったのは、調査担当者に代わって報告を行った筆

者の力不足が原因である。まずは整備確認調査を含めてこれまで数多く行われてきた調査結果を理解し、そして課題を整理、検討したうえで、今後の進むべき道を模索していきたいと考えている。

註

1. 平成18年度報告において、「図14 講堂基壇部平面図」として掲載されている立面図には、「68.000m」という標高が示されている（青木2007；p25）。しかし、原図と照合した結果、この高さは「68.15m」であることが判明したので、ここでお詫びを申し上げるとともに訂正しておきたい。

参考文献

- 青木昭和(編)(2007)『平成18年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告38) 富田林市教育委員会。
- 青木昭和(編)(2008)『平成19年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告40) 富田林市教育委員会。
- 青木昭和(編)(2009)『平成20年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告44) 富田林市教育委員会。
- 青木昭和(編)(2010)『平成21年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告45) 富田林市教育委員会。
- 浅野 清ほか(1961)『河内新堂・烏含寺跡の調査』(大阪府文化財調査報告 第十二輯)。
- 粟田 薫(編)(2000)『平成11年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告31) 富田林市教育委員会。
- 粟田 薫(編)(2003)『新堂庵寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳(本文編・図版編)』(富田林市埋蔵文化財調査報告35) 富田林市教育委員会。
- 粟田 薫(2005)『新堂庵寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究』山中一郎(編)『大阪府富田林市所在 新堂庵寺・オガンジ池瓦窯出土瓦の研究—京都大学総合博物館平成17年春季企画展示のための研究成果—』京都大学総合博物館資料基礎調査系。
- 井西貴子(編)(2001)『新堂庵寺』(大阪府埋蔵文化財調査報告2000-1) 大阪府教育委員会。
- 小浜 成(1999)『新堂庵寺発掘調査概要Ⅲ』大阪府教育委員会。
- 藤 直幹・北野耕平(1961)『河内新堂庵寺(第一期調査概要報告書)』大阪大学文学部国史研究室・大阪府教育委員会。
- 山中一郎(2010)『新堂庵寺物語』坪井清足先生卒寿記念論文集—理文行政と研究のはざままで—(上巻)『坪井清足先生の卒寿をお祝いする会』
- 山中一郎・粟田薫(2009)『瓦研究の新方法—富田林・新堂庵寺の瓦磚類資料の研究から—』(京都大学総合博物館平成17年春季企画展カタログ(補填版)) 京都大学総合博物館資料基礎調査系。

圖 版



I区 遺構検出状況(南から)



I区 遺構段下げ後(南から)



I区 ビットの状況(北西から)



Ⅱ区 遺構検出状況(西から)



Ⅱ区 SD1掘削状況(南から)



Ⅱ区 SD2掘削状況(南西から)



Ⅲ区 東壁土層断面(西から)



Ⅲ区 トレンチ全景(東から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせい22ねんど とんだばやししないいせきぐんはつくつちようさほうこくしよ							
書名	平成22年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	富田林市文化財調査報告							
シリーズ番号	47							
編著者名	角南辰馬(編) 栗田 薫							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL0721-25-1000(代)							
発行年月日	2011(平成23)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどうはいじあと 新堂廃寺跡	とんだばやし 富田林市 みどりがおちよう 緑ヶ丘町	27214	17	34° 30′ 36″	135° 36′ 3″	2010.1.13~ 2010.3.31	68.5	整備計画策 定のための 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新堂廃寺跡	寺院跡	飛鳥~中世		ピット、溝		瓦、須恵器、 土師器		

平成22年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書

発行年月日	2011年3月31日
編集・発行	富田林市教育委員会
住 所	富田林市常盤町1番1号
印 刷	合資印刷所

